

唐 櫃 山 古 墳

2001年3月

大阪府教育委員会

はじめに

藤井寺市国府1丁目、近鉄南大阪線土師ノ里駅のほど近くに、唐櫃山と呼ばれる5世紀後半に築かれた古墳があります。今は民家の庭先に墳丘の一部と石棺が残されているだけですが、もとは全長53mの前方後円墳で、昭和30年に行われた発掘調査では、複数の甲冑や金銅装の馬具をはじめとする多数の副葬品が出土しました。石棺も隣接する長持山古墳のそれとともに最も古いタイプの家形石棺で、大仙古墳や誉田御廟山古墳をはじめとする5世紀の大型前方後円墳の大半が未調査のなか、規模ははるかに小さいものの、古市古墳群の一角にあってその内容の明らかな貴重な古墳となっています。唐櫃山古墳という名称は、今にいたるまで日本古墳文化のなかで燦然とした光を放ち続けているのです。

今回の発掘調査は、昭和30年の発掘調査の契機となった府道堺大和高田線への歩道設置にもとづくもので、小規模なものでありましたが、唐櫃山古墳の墳丘と周濠の一部が検出され、部分的には葺石の残っていることも確認されました。これらの成果は、唐櫃山古墳の内容をより豊かなものにするとともに、この古墳の重要性をますます高めるものです。さらに、墳丘の大半は既に削られているものの、地下に埋没した部分には多くの貴重な文化財としての情報が残されていることを示しています。

古市古墳群、百舌鳥古墳群の存在する地域はほとんどが市街化していますが、その地中には多くの貴重な文化財が今でも埋もれています。日本を代表する古墳群の解明には今後も地道な発掘調査の積み重ねが欠かせません。

発掘調査の実施にあたっては、地元の皆様並びに関係機関のご理解とご協力をいただき、深く感謝いたします。今後とも本府の文化財保護行政へのご理解とご協力をお願いいたします。

平成13年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が実施した府道堺大和高田線歩道拡幅工事に伴う、藤井寺市国府1丁目所在唐櫃山古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部道路課の依頼を受けた文化財保護課が、平成13年1月から平成13年3月2日まで、調査第2グループ主査佐久間貴士を担当者として実施した。
3. 遺物整理及び本概要作成は、佐久間と調査管理グループ技師小浜成が担当し、平成13年3月30日に終了した。
4. 本書の執筆は、佐久間、小浜が行い、編集は小浜が行った。それぞれの文責は文末に記した。
5. 発掘調査、遺物整理及び本書作成に要した経費は、全額大阪府土木部が負担した。

本文目次

はじめに

例言

第1章 調査に至る経過	1
第2章 歴史的・地理的環境	3
第3章 調査の概要	5
第4章 出土遺物	11
第1節 旧石器	11
第2節 埴輪	11
第3節 古代～近世	22

挿図目次

第1図 調査区位置図	1
第2図 唐櫃山古墳墳丘（上）及び主体部（下）	2
第3図 唐櫃山古墳石棺実測図	2
第4図 古市古墳群分布図	4
第5図 調査区全体図	5
第6図 葺石平面・立面・断面図	8
第7図 唐櫃山古墳平面図および墳丘断面図	9・10
第8図 墳丘内出土旧石器	11
第9図 墳丘西側斜面出土埴輪①	15
第10図 墳丘西側斜面出土埴輪②	16
第11図 墳丘盛土内出土埴輪①	17
第12図 墳丘盛土内出土埴輪②	18
第13図 周濠内出土埴輪①	19
第14図 周濠内出土埴輪②	20
第15図 周濠内出土埴輪③	21
第16図 周濠内出土土器	22

図版目次

- 図版 1 調査区 1. 調査区全景 (西から) 2. 調査区全景 (東から)
- 図版 2 墳丘 1. 墳丘西側 1 段目テラスと 2 段目葺石検出状況 2. 葺石
- 図版 3 墳丘 1. 墳丘東側周濠 (西から) 2. 墳丘東側周濠 (東から)
- 図版 4 墳丘 1. 墳丘西側断面 2. 墳丘盛土断面 (西から)
3. 1 段目テラスと 2 段目葺石断面 (南から) 4. 墳丘盛土断面 (南から)
- 図版 5 出土遺物 (旧石器) 墳丘盛土及び周濠内出土ナイフ型石器 (1~3)、翼状剥片 (4~8)
翼状剥片石核 (9~11)、楔形石器 (12) (原寸)
- 図版 6 出土遺物 (旧石器) 図版 5 の裏面
- 図版 7 出土遺物 (埴輪) 墳丘西側斜面出土埴輪
- 図版 8 出土遺物 (埴輪) 墳丘西側斜面出土埴輪
- 図版 9 出土遺物 (埴輪) 墳丘盛土内出土埴輪
- 図版 10 出土遺物 (埴輪) 墳丘盛土内出土埴輪
- 図版 11 出土遺物 (埴輪) 墳丘東側周濠内出土埴輪
- 図版 12 出土遺物 (埴輪) 墳丘東側周濠内出土埴輪
- 図版 13 出土遺物 (土器他) 墳丘上面及び周濠内出土遺物
- 図版 14 出土遺物 (土器他) 墳丘東側周濠内出土遺物

第1章 調査に至る経過

唐櫃山古墳の既往の調査

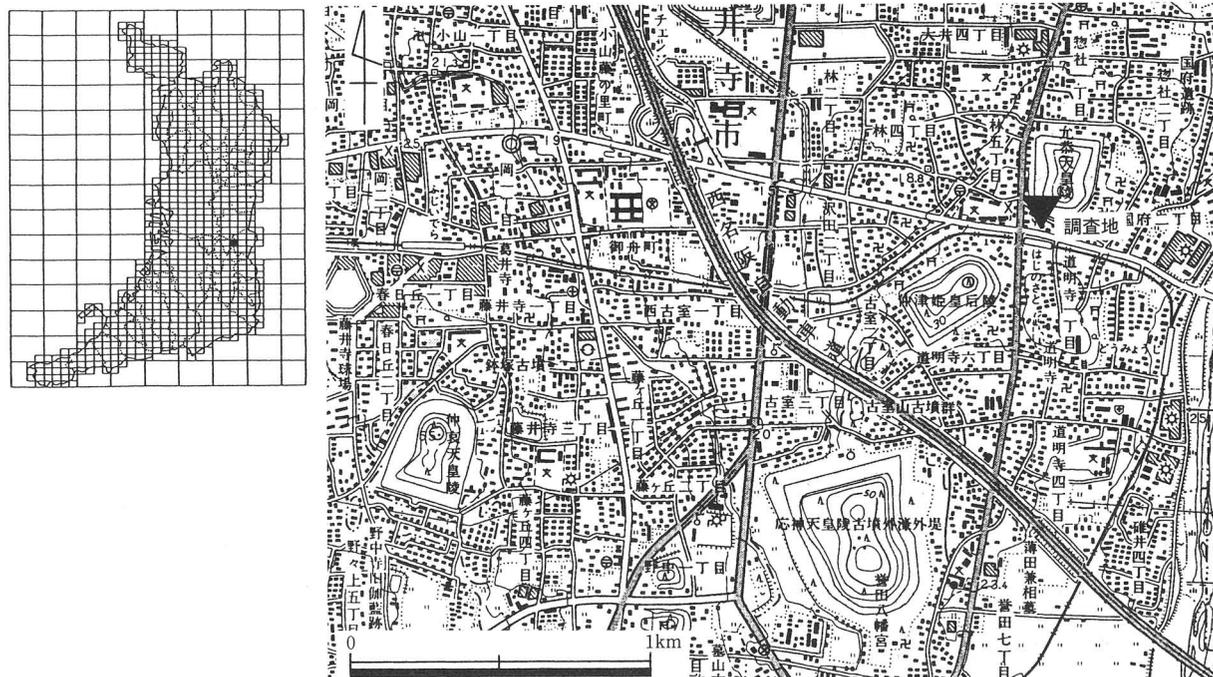
戦後の開発が進み、古市古墳群のなかでも小古墳が破壊を受けるなか、主要地方道堺大和高田線の開通工事に伴い、唐櫃山古墳も後円部が破壊されることとなり、1955年当時大阪大学国史学研究室の北野耕平氏が中心となり、発掘調査が実施された。この結果、唐櫃山古墳は、前方部を北西に向ける全長53mの帆立貝式前方後円墳で、後円部径38m、高さ8m、前方部幅21m、高さ3mの規模を測ることがわかった。また、墳丘には葺石と埴輪列の存在が確認された。

主体部の調査では、後円部中央に、主軸にほぼ直交して刳り抜き式の家形石棺をおさめた竪穴式石室が見つかった。石棺と石室の間の両小口部分には、副葬品が納められており、南側には小札鋌留式衝角付冑・小札鋌留式眉庇付冑・三角板鋌留式短甲・頸甲・肩甲などの武具類、北側には鉄地金銅張f字形轡などの馬具類が収められていた。棺内は盗掘されていたが、ガラス玉が遺存していた。

1981年には、唐櫃山古墳の南半を横断する主要地方道堺大和高田線の南側、西行車線敷下に日本電信電話公社（現NTT）の埋管工事が、北側、東行車線敷下に関西電力株式会社の埋管工事が行われることとなり、発掘調査を行った。調査の一部は唐櫃山古墳墳丘の下部構造におよび、墳丘盛土の状況が明らかとなった。また、出土埴輪資料も蓄積されるなど、以前の調査では得られなかった墳丘および外面施設の成果が得られた。

今回の調査に至る経過

今回の調査は、土師ノ里駅前を東西にはしる主要地方道堺大和高田線の歩道拡幅工事に伴うも



第1図 調査区位置図

のである。古墳は道路建設の際その上部がかなり削平されたが、道路の高さより下の墳丘は残っていた。よって大阪府都市建築部道路課及び富田林土木事務所と協議の上、発掘調査をすることとなった。

調査時の現況は、古くからの土地所有者である黒田家の庭である。古墳の半分は庭の中に取り込まれ、墳丘の下半部が良く残っていた。道路とほぼ同じ高さに削られたため、西が高く、道路の傾斜にそって東が低くなっていた。墳丘中央部は道路より数十cm高く残され、1946年調査時に出土した石棺が裾えられていた。

西側の墳丘斜面は埋められて平坦になっていた。東側は墳丘斜面が残り、周濠と推定される部分は、墳丘より1.6mほど低くなっていた。この墳丘の東側から北側には黒田家の庭園が造られていた。墳丘斜面には大きな庭石が配され、樹木が植えられていた。この庭園は1946年調査時にはなかったもので、調査の結果墳丘が3mほど削られていることがわかった。

黒田家の庭は石垣で囲まれ、その内側に幅1mの土堤があり、庭木で囲まれていた。庭木や庭石の撤去は黒田家が実施したので、抜き取り工事の際には立会調査を行った。この時には、埴輪が出土したが、埴輪列や葺石は発見されなかった。

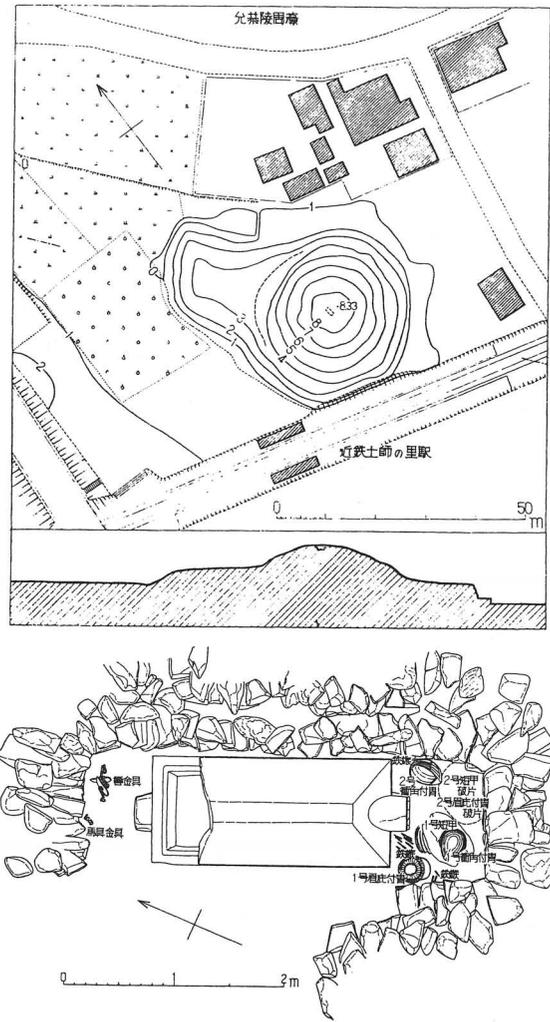
(佐久間・小浜)

<参考文献>

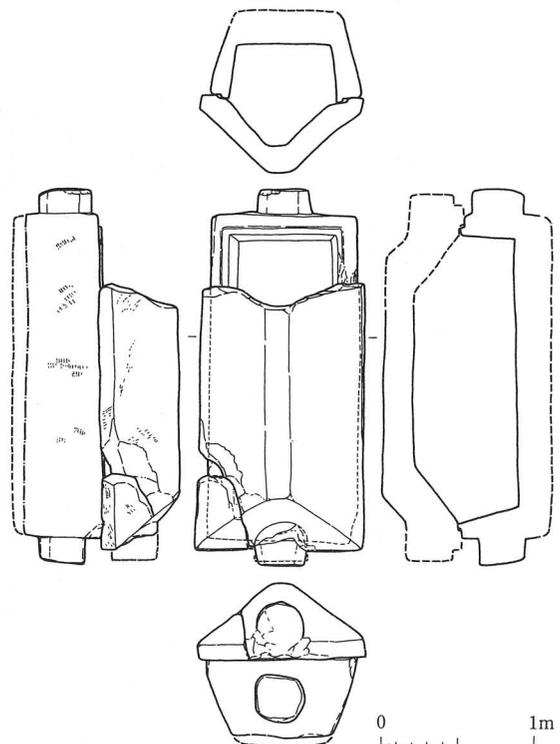
大阪府教育委員会『允恭陵古墳外周溝・長持山古墳の調査—国府遺跡80-2区』1980年

大阪府教育委員会『允恭陵古墳外堤の調査—国府遺跡80-3区』1981年

大阪府教育委員会『唐櫃山古墳発掘調査概要—国府遺跡81-6・9区の調査』1982年



第2図 唐櫃山古墳墳丘(上)及び主体部(下)
(『河内野中古墳の研究』1976 大阪大学より)



第3図 唐櫃山古墳石棺実測図

第2章 歴史的・地理的環境

周辺の主要な遺跡

唐櫃山古墳ひいては古市古墳群の北半部分が立地する国府台地の段丘上には、旧石器時代より遺跡が連綿と形成されている。まず、国府台地の縁辺部には国府遺跡が存在する。国府遺跡は、学史的にも知られ、標識の国府型ナイフ形石器を出土する旧石器時代に始まり、人骨が良好に残存する土器棺墓の密集する縄文・弥生時代、大型掘立柱建物が建ち並び、国府跡と推測できる官衙的性格の強い奈良時代の遺構などがとくに注目される。また、国府台地から北に下がったところでは、縄文時代晩期から古墳時代初頭にかけて集落が営まれており、遺構および大量の土器群が見ついている船橋遺跡が存在する。国府台地を派生させる羽曳野丘陵も含めて概観すると、旧石器製作址の翠鳥園遺跡や旧石器時代の住居跡が見つかったはざみ山遺跡、縄文時代中期の住居跡が見つかった林遺跡などがある。また、古代には、この国府台地に難波津と飛鳥と結ぶ長尾街道などの幹線道路が走っており、当時から交通の要衝の地でもあった。

唐櫃山古墳を取りまく歴史的環境

古墳時代には、羽曳野丘陵から北東側にのびる国府台地の段丘上に、大王陵級の仲津山古墳・墓山古墳・応神陵古墳（誉田御廟山古墳）・允恭陵古墳（市野山古墳）など大型前方後円墳を中心に大小約100基の古墳で古市古墳群が形成されていた。

そのなかで、唐櫃山古墳は、允恭陵古墳の後円部南側外堤に接するように位置する、全長約53mの帆立貝式前方後円墳である。近くには、現在は土取りで消滅したが、允恭陵古墳後円部の西側外堤に隣接して径約40m・高さ約7mの円墳である長持山古墳が立地していた。長持山古墳の副葬品には、横矧板鋌留式衝角付冑や挂甲、金銅製鞍金具・木芯鉄板張輪蓋・轡・剣菱形行杏葉などがある。ともに、鋌留甲冑や金銅装馬具を副葬し、竪穴式石槨で、阿蘇凝灰岩を削り抜いた家形石棺を有しており、ほぼ同時期の築造と考えられる。ともに允恭陵古墳の陪塚の可能性が高い。

古市古墳群中で主体部が調査されている例は少ない。土師氏の墓制系譜と考えられる盾塚・鞍塚古墳などの主体部調査とともに、唐櫃山・長持山古墳の2古墳は、盗掘を受けていたものの、内部主体の構造および副葬品の一部が調査で判明しており、時期の検討および大型前方後円墳に近接する陪塚の存在の中小古墳の、古市古墳群内での位置づけを検討する上で重要である。

唐櫃山・長持山の両古墳は、古市古墳群内では目立たない存在であるが、その副葬品の量と質は、他地域の小首長墳と比較しても劣らないものである。また、応神陵古墳の北側から允恭陵古墳の西側のエリアには、小規模の円墳で構成される林古墳群や沢田古墳群などが展開している。

允恭陵古墳の築造後、国府台地に大王陵クラスの古墳は築かれなくなる。国府台地の南方および手前の羽曳野丘陵の段丘上に移り、新規発見の水塚古墳や久米塚古墳のほか、大王陵級の峯ヶ塚古墳や仁賢陵古墳や清寧陵古墳・安閑陵古墳などが築かれていくこととなる。（小浜）



第4図 古市古墳群分布図

1. 唐櫃山古墳
2. 長持山古墳
3. 允恭陵(市野山)古墳
4. 津堂城山古墳
5. 仲津山古墳
6. 墓山古墳
7. 応神陵(誉田山御廟山)古墳
8. 白鳥陵(軽里大塚)古墳
9. 仲哀陵(岡ミサンザイ)古墳
10. 仁賢陵(ボケ山)古墳
11. 清寧陵(白髪山)古墳
12. 安閑陵(高屋城山)古墳
13. 古室山古墳
14. 大鳥塚古墳
15. 盾塚古墳
16. 鞍塚古墳
17. 珠金塚古墳
18. アリ山古墳
19. 東山古墳
20. 藤の森古墳
21. 蕃上山古墳
22. はざみ山古墳
23. 野中宮山古墳
24. 越中塚古墳
25. 岡古墳
26. 野中古墳
27. 浄元寺山古墳
28. 西墓山古墳
29. 青山1号墳
30. 五手治古墳
31. 水塚古墳
32. 久米塚古墳
33. 峯ヶ塚古墳

第3章 調査の概要

歩道予定地は長さ60m、幅4mである。敷地のすぐ南に接して、排水溝があるため、発掘調査は長さ55m、幅3m、面積165㎡とした。古墳の西側では墳丘斜面とテラス、及び葺石を検出したが、埴輪列は確認できなかった。東側は墳丘が3mほど削られており、葺石・埴輪列ともに検出されなかった。また墳丘の盛土の調査のため、墳丘は歩道設置の際地盤改良工事で掘削する深さまで掘った。墳丘の掘削深度は約1.5mである。道路は西が高く、東に低くなっており、残っている墳丘も東側が低くなっている。よって墳丘の掘削面も途中で段を二箇所設けて東側を掘り下げた。その結果東側では古墳築造時の表土及び地山を確認できた。

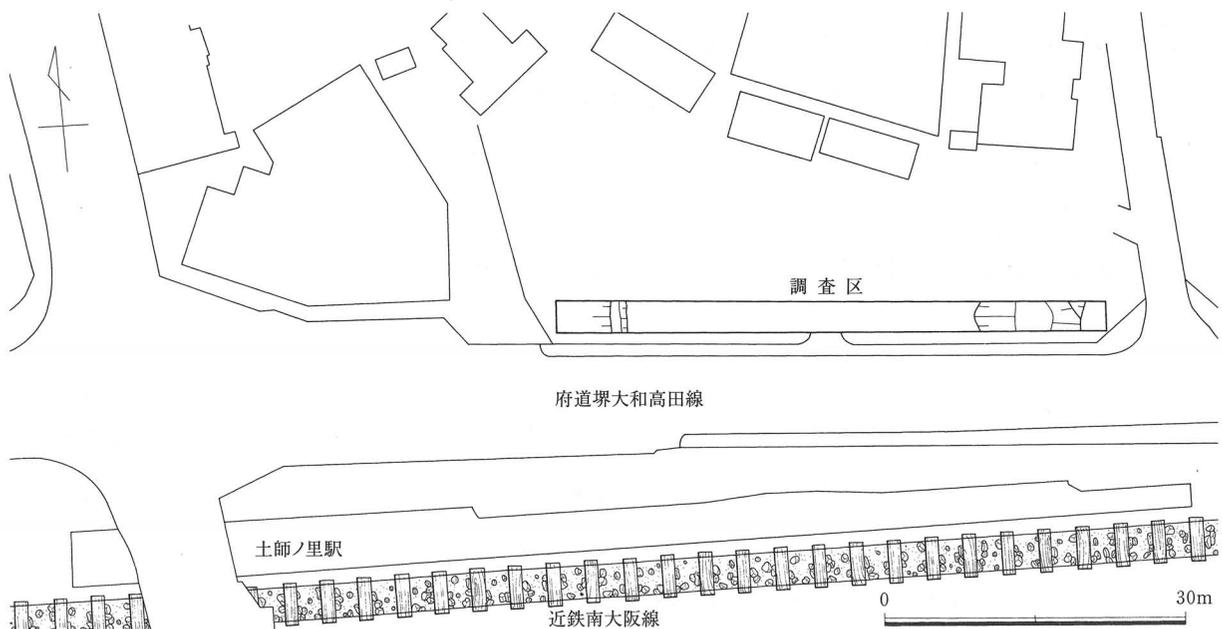
なお古墳築造年代は、埴輪から5世紀第3四半期と推定している。

古墳の崩壊土と周濠の埋没

調査に伴って土層の名称を第1層から第11層とつけて遺物を取りあげた。西側から調査を始めたので、層序名は必ずしも時代順となっていない。土層断面図(第7図)ではさらに細別した土層名をつけたので「土層図○○層」と表記した。

第1層から第4層(土層図1~20層)が、古墳削平後の整地土である。土層図の18層は古墳を崩した土をならしてあり、土層図21・23層の上面が1947年調査時の地表面である。標高はT.P. 27.4m前後である。公表されている調査図ではこのあたりに1mの等高線が描かれており、墳頂部は8.33mとあるので、当時の墳頂部の標高はT.P. 34.7m前後と推定される。

第5層が1947年調査時の古墳表土である。近代・現代の陶磁器を含んでいる。第6層(土層図30~34)が葺石を覆っている古墳の崩壊土で、埴輪の他に江戸時代の陶磁器が少量出土した。葺石のすぐ上(土層図34層)からも江戸時代の陶器が出土したので、江戸時代には葺石が一部露出



第5図 調査区全体図

していたと思われる。西側は周濠確認のためかなり深く掘削したが、周濠は確認できなかった。なお西側は土が柔らかく崩壊のおそれがあったため、掘削後一部をすぐ埋戻した。よって150分の1の平面図は西端掘削部の範囲を表示していない（土層断面図及び750分1全体図には表示）。

東側では墳丘が3mほど削られていたが、周濠がよく残っていた。第12層（土層図21～27層）は近代の堆積土である。第13層（土層図35～38）は周濠の上半部を埋めている堆積土で江戸時代の陶磁器を含んでいた。第14層は周濠の下半部の堆積土で、奈良時代の土師器と鎌倉時代の瓦器を僅かに含むが、15世紀の瓦質土器を多く出土した。埴輪と崩落した葺石も多く出土した。第14層は上部（土層図39・40）と下部（41・42）に分けて遺物を採集したが、15世紀の遺物は下部にも多く含まれていた。このことから唐櫃山古墳の東側周濠は室町時代までかなり深い状態で残っていたが、15世紀に一期そのなかばが埋まったことが判明した。この時東側の葺石も崩落した。埴輪の出土量も第14層が最も多い。周濠底面には滞水した痕跡はなく、地山が砂礫土であることから空濠であったと考えられる。周濠の上半部は江戸時代に埋没した。堆積土は砂礫土で、周辺から流れ込んだものでなく、人為的に埋められたと考えられ。出土遺物の大半は17世紀後半の陶磁器で、埋没時期はこの時期を想定している。

古墳の盛土

古墳は標高T. P. +28.4mの高さから築造されている。古墳築造時には黄褐色粘質土の地山の上に厚さ10cmの表土があった。しかし東の周濠の外側には黄褐色粘質土の地山はなく、標高もT. P. 27.2mと1m以上低い。この黄褐色粘質土は古墳の盛土には使われていないので、古墳築造時に削平したとは考えにくい。この地域の微地形は西が高く東が低いので、当初から古墳は微高地に築造されたと考えられる。

古墳の盛土は土質の違いによって大きく砂質土と砂礫土に分けられる。その他に僅かの粗砂と粘質土が含まれている。盛土はいずれも唐櫃山古墳周辺の地山にみられる土である。

墳丘築造は何回にも分けて土を水平に積み上げる作業工程をとっている。第1段目は厚さ50から60cmで、西側に砂質土（土層図91層）・東側に砂礫土（土層図96層）が積み上げられている。第2段目は中央西寄りにまず砂質土が積み上げられ、両脇に砂礫土が水平に積み上げられている。古墳の中心部分と両脇で土質が違うのが注意される。

中央の砂質土はかなり細かく分層できた。その中には砂礫土や粗砂も含まれており、同時に異質の土が積み上げられたことがわかった。これは盛土に使う土取り場が同時に複数存在したためと考えられる。

なお1981年、日本電信電話公社の埋管工事に伴って堺大和高田線の道路の下の墳丘が大阪府教育委員会によって調査されている。その時にはこの砂質土の堆積を地山と誤認している。当時は埋管工事のため掘削深度が浅く、砂質土自体が地山の土を盛り上げたものなので、わかりにくかったと思われる。今回は掘削深度が深く、築造当時の地表面が確認できたので、ここで訂正しておきたい。

墳丘西側テラスと葺石

西側墳丘には 第1段目のテラスとそれに伴う葺石が検出された。テラスの標高はT.P.29.56mである。テラスの幅は約1mである。このテラスは前方部へつながっていくものである。葺石はテラスの上部の墳丘斜面に残されていた。葺石は、長径15cm前後の細長い石を並べ、その上に階段上に大きな石を積み上げていた。葺石は長径20cm前後のものが多いが、長径40～45cmもある大きな石も使われている。

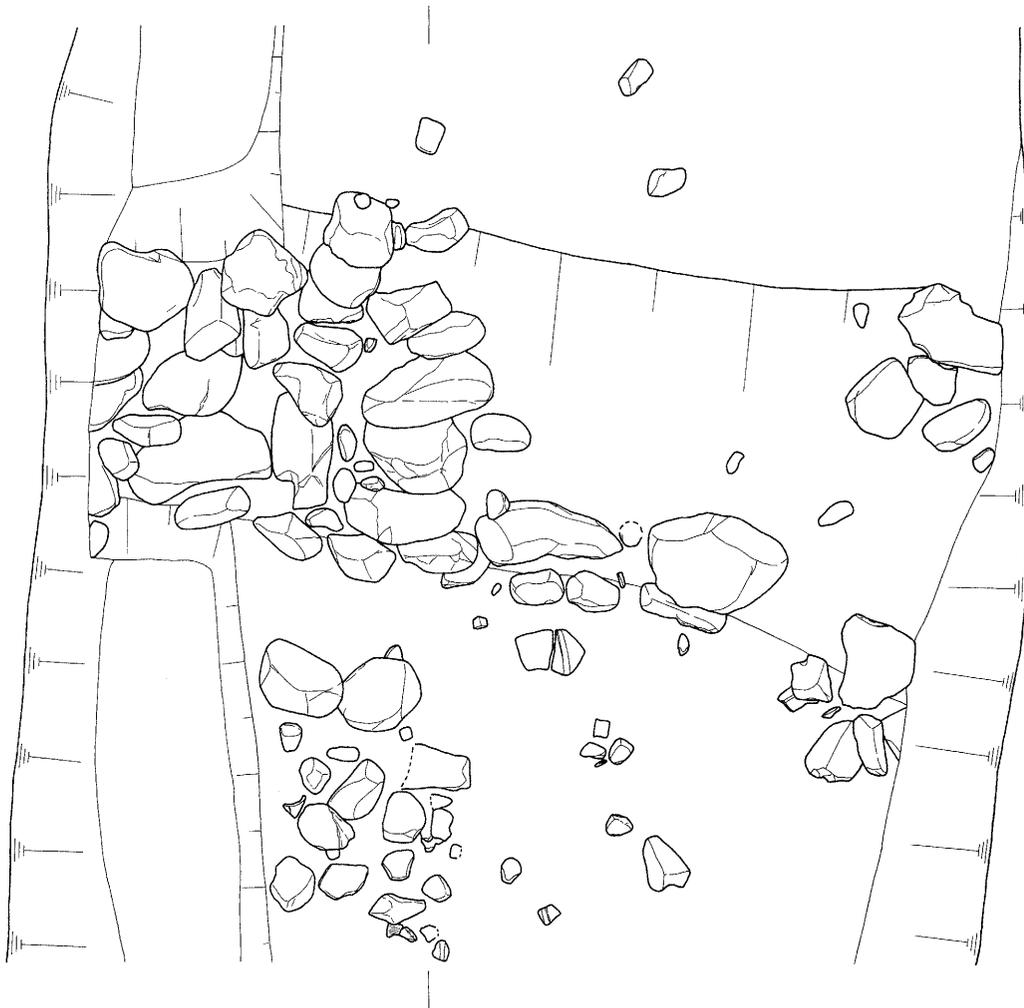
崩れた石を取り去ってみると、整然と列をなして積み上げていることがわかる（図版2の下）。またテラス上には崩壊した葺石と埴輪が散乱していた。テラス面では埴輪列は確認されていないので、上から転落してきたものである。その量はそれほど多くない。

墳丘東側の周濠

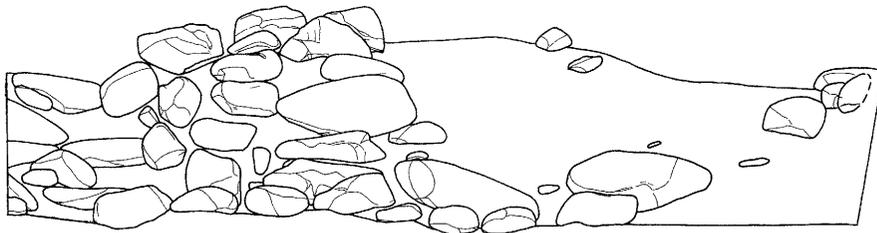
東側では周濠が検出された。現況では幅約9mである。深さは、墳丘側の肩から約2m、周濠の外側の肩から約1.5mである。周濠は地山の砂礫土を掘り抜いている。底面はU字形に窪んでいる。墳丘側の壁は垂直に近く、外側の壁はややゆるやかである。周濠の外側の地山もゆるやかに下っているが、築造時に成形されたものかどうかは不明である。

周濠底面には、滞水時にみられる粘質土の堆積が全くみられず、空濠であったと考えられる。周濠内の埋土からは多数の埴輪と葺石が出土した。とりわけ15世紀に堆積した埋土の下層から多く出土した。この時期に古墳がなんらかの理由でさわられた可能性が高い。

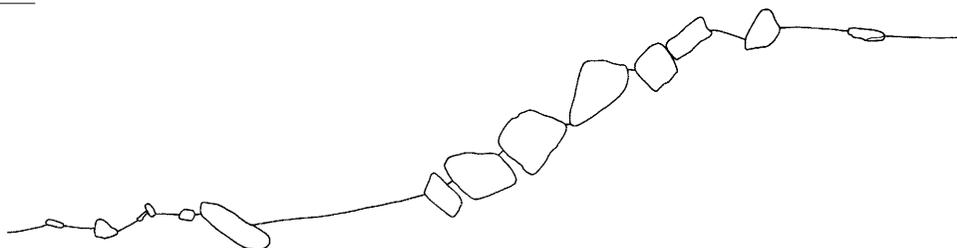
東側墳丘は周濠から3mほど削られていて、テラスや葺石は確認できなかった。その時に周濠の墳丘側の肩も地山ごと削平を受けている。周濠の西側の肩も、直上に江戸時代の土が堆積しており、若干削平されている可能性が高い。仮に古墳築造時の地表面から周濠が掘削されていたとすると、墳丘側の肩からの深さは2.8mとなる。 (佐久間)



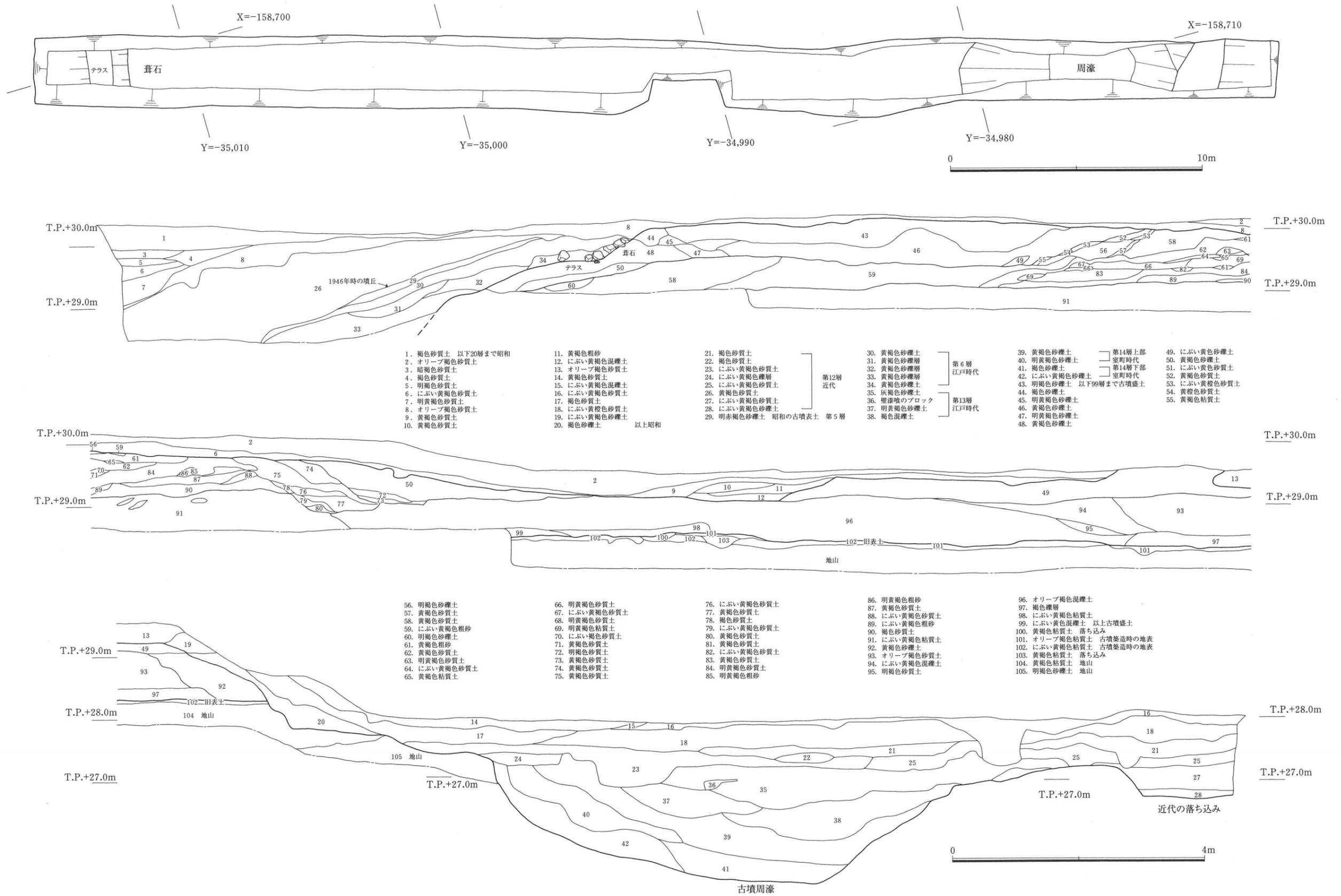
T.P. 30.000



T.P. 30.000



第6図 墓石平面・立面・断面図



第7図 唐櫃山古墳平面図及び墳丘断面図

第4章 出土遺物

第1節 旧石器

墳丘部や周濠の中から、旧石器時代の石器や剥片が39点出土した。

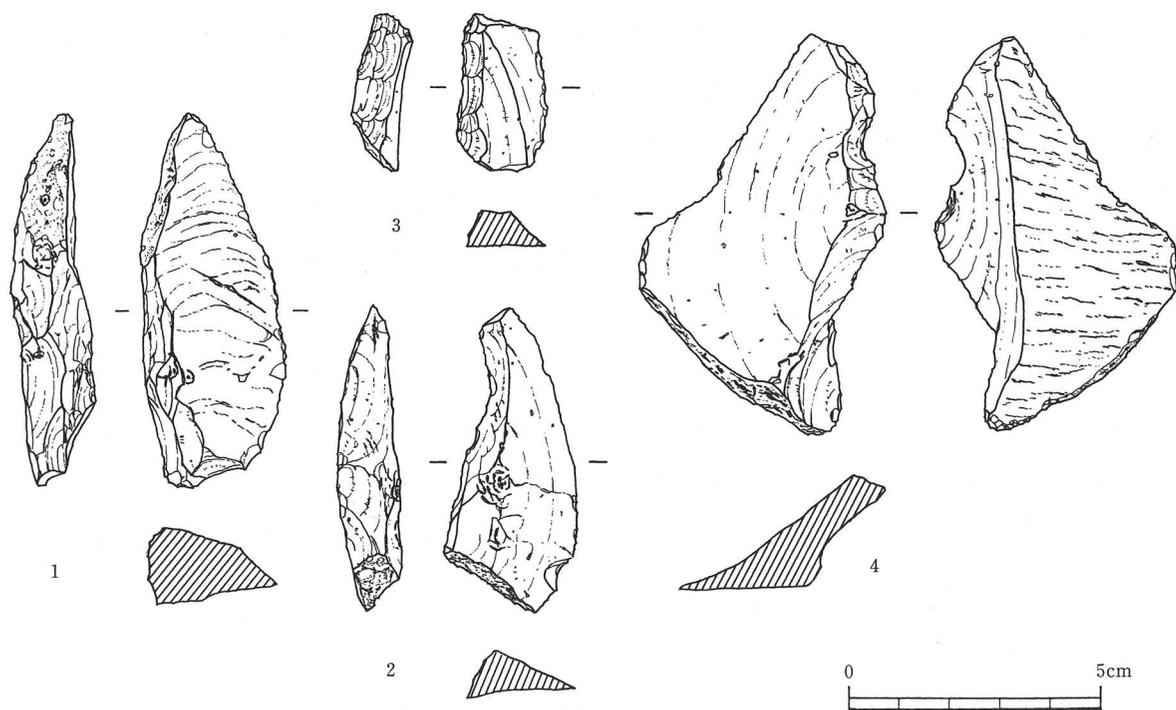
原位置を保っているものはなく、全て二次的堆積土層からの出土である。石器の種類は、国府型ナイフ形石器3点、翼状剥片4点、翼状剥片石核4点、楔形石器1点、剥片27点である（第8図・図版5・6）。すべて、サヌカイト製で、外面が暗灰色に風化している。古墳築造時に、旧石器時代の石器製作址が壊されたものと考えられた。

第2節 埴輪

今回の調査では、墳丘西側斜面・墳丘東側周濠・墳丘盛土の調査により、コンテナ約15箱の円筒埴輪片が出土した。この大きく分けられる3群から出土する埴輪資料は、唐櫃山古墳の築造前と築造後の時間関係を表すこととなるので、この各群の資料ごとに基づいて、観察していくこととする。墳丘西側斜面出土埴輪（第9・10図）

後円部西側の1段目斜面・テラスおよび2段目墳丘斜面上の堆積土からの出土であり、唐櫃山古墳に樹立されていた可能性が最も高いものである。小片が多く、摩滅がひどいため、調整の不明瞭な資料も多いが、唐櫃山古墳樹立埴輪の基本資料となりうるものである。

法量・形態 完形で残る資料はない。部分的に残る口縁部片や底部片から、復元できる底径は



第8図 墳丘盛土及び周濠内出土旧石器（ナイフ形石器1～3、翼状剥片4）

約20cm～25cm、口径は約29cm～33cmの小型タイプが主体をしめる。色調は、黄橙色を呈し、焼成はやや甘い。3段以上残る資料は、1点のみ（第9図—2）であり、何段構成か断定はできないが、底径の大きさから、おそらく3条4段ないし4条5段の小型円筒埴輪であろう。全体的なプロポーションは、底部片・体部片・口縁部片の形態から推測するに、底部からやや開きぎみに立ち上がり、口縁端部は直立するかわずかに外反する形態である。口縁端部は面を持たせている。底部の器厚は2cmをこえない程度のものが大半である。

外面調整 外面は、一次調整がタテ・ナナメハケで、①二次調整はヨコハケ原体を一定間隔ごとに静止させながら施文するB種ヨコハケを突帯間に1単位施すか、②静止痕が認められないストロークの長いC種ヨコハケを施す。①の場合、B種ヨコハケの原体は、平均6～10条/cmであるが、4条/cmから13条/cmまでとばらつきが見られる。静止痕が2ヶ所以上認められる資料のうち、第9図19では、静止痕間隔が3.5cm、静止痕角度が85°であり、大型円筒埴輪になる第10図27では、静止痕間隔が4.3cm、静止痕角度が80度である。しかし、その他の資料では、静止痕角度が55°（第9図14）や70°（第9図15）など、かなり傾く例も認められる。

また、ヨコハケは丁寧でなく、一次調整のタテハケがかなり遺されている。なお、二次調整がなく、一次調整のタテハケのみの資料も認められる。

内面調整 内面は、ナデあるいは縦・斜め方向のハケで調整している。この調整の差は、個体差ではなく、体部の上半と下半での部位差であろうと考えられる。

突帯 突出度は小さくなく、断面はやや低い断面M字・台形を呈するものが多い。突出高は、約0.5cm～0.6cmである。一部に押圧技法も認められた。

透かし 透かし孔が完全に残る資料はないが、破片で確認できるのは、円形の透かしのみである。何段目に透かしがどういう配置で穿孔されているか不明であるが、各段の穿孔は突帯間に丁寧にあけず、貼り付けた突帯の際まで偏っている例が多い。

朝顔形埴輪 出土量は少ないが、若干認められる（第10図40～42）。

形象埴輪 形象埴輪の出土も少なく、残存状況も悪い（第10図43・44・45）。44は蓋の笠部であり、45は立ち飾りの一部であると考えられる。43は家形埴輪の屋根の可能性はある。

墳丘盛土内出土埴輪（第11・12図）

墳丘構築の際の盛土と考えられる土層から出土した埴輪片である。唐櫃山古墳を造営する際、周辺古墳から転落した埴輪片を含んだ流土などを削平して利用したために、埴輪片が多数含まれていると考えられる。そのため、唐櫃山古墳築造よりも明らかに時期的に古い埴輪であるという点で、これらの資料は重要である。ただ、大きく接合できる資料がないことや多様な資料が存在することから、特定の古墳を破壊したものではないと考えられる。このことは、底部片が少ないことから傍証できよう。

法量・形態 図化し得たもののなかには、口縁径約27cmの資料があり（第11図48）、底部径約20cm程度に復元できる小型円筒埴輪も含まれるが、そのほかの大半は、底径約35cm前後で口縁

径約40cmを越える大型円筒埴輪である。全体のプロポーシオンは、底部・体部・口縁部の各破片資料から推測するに、底部からほぼ直線的に立ち上がる形態で、口縁は突帯状のものを貼り付ける、いわゆる貼付突帯の口縁（第11図46・47）である。

外面調整 外面は①突帯間にB種ヨコハケを2単位施したもの（第11図49）、②B種板ナデを2単位施したもの（第12図62・64）、③B種ヨコハケを1単位施した（可能性の高いものも含めて）もの（第11図51・52、第12図56～59）、④板ナデを1単位施したもの（第11図50）、⑤ヨコハケの静止痕が認められない、ストロークの長いC種ヨコハケを施したもの（第12図54）、⑥一次タテハケのみの小型円筒埴輪片（第12図55）など多種多様である。

静止痕をもつ資料は、すべて静止痕角度が80°～90°で突帯に対してほぼ垂直である。ただ、静止痕間隔は施文単位を2単位もつ資料①・②は2.2cmから4.0cmであり、1単位もつ資料③・④は4.1～5.0cmと前者に比べてやや広い。また、①・②の資料から、2単位施文する際の原体幅は、約4.2cm以上はあると推定できる。

内面調整 内面は縦方向のハケを施す例が多いが、上記②・④の外面にB種板ナデを施す資料は横・斜め方向のナデを施している。

突帯 突出の高さは0.8cm～1.3cmであり、断面がM字・台形になる。

透かし 透かし孔が完形で残る資料はないが、観察できるのは円形透かしのみである（第11図51、第12図58・62・64）。何段目に透かしがどういう配置で穿孔されているか不明であるが、各段の穿孔は突帯間に丁寧に穿孔されている。

朝顔形埴輪 出土量は少ない（第12図63・64）。第12図64は、朝顔形埴輪の肩部にあたる部位を含む。肩部に移行するところで、突帯間が4.3cmと非常に短くなるタイプである。

形象埴輪 明瞭な形象埴輪の資料はない。第12図61は、径が14.6cmと小さく、普通円筒埴輪ではなく、形象埴輪の基部の円筒部分であると考えられる。また、第11図53は、外面調整が底部端から幅3.5cmのヨコハケ→約2.5cmのナナメハケ→約1.5cmのヨコハケ→約2.5cmのナナメハケと、装飾性を持たせた施文であり、平面形もやや楕円気味になることから、形象埴輪の基部になるのではないかと考えられる。ともに、赤色顔料を塗布して焼成しているようであり、内外面とも赤橙色を呈している。

周濠内出土埴輪（第13図～第15図）

墳丘の東側周濠内から出土した埴輪片である。周濠内埋土の包含土器から、おもに15世紀代から江戸時代にかけて埋没しており、緩やかに残った周濠跡の最上層の窪みは近代になって埋没したことが分かっている。そのため、周濠内から出土する資料は、前述した墳丘西側斜面出土の推定唐櫃山古墳樹立埴輪と同様の埴輪片を含むものの、多様な時期・特徴のものが多く含まれており、唐櫃山古墳の築造前後の時間軸を厳密に検討しうるものではない。しかし、以下の観察により、時期的には同時かやや後出する、大型円筒埴輪片で底部高が低い資料が多く認められることが分かった。つまり、隣接する允恭陵古墳外堤の埴輪や、関係の濃い唐櫃山古墳自体にも一部用

いられた可能性も残る大型円筒埴輪の資料が多く含まれていると考えられる。

分量・形態 底径25cm前後の小型円筒埴輪と底径35cm前後の大型円筒埴輪の大きく2種の埴輪が認められる。口縁部片（第13図69～72・76～78）は、すべて直立口縁で、端部に面を持つ。外面の調整は一次タテハケ、ヨコナデ、二次ヨコハケなど多様である。底部は、器厚2.5cmを越えるものもあり、概して厚い。また、底部高に関して、11～12cmを計るものを若干含むものの（第14図93、第15図102）、6～8.5cmと低いもの（第14図92、第15図98から101・106）が多い。

外面調整 口縁部片では、一次タテハケ（第13図71）、二次ヨコハケ（第13図69・70・77）のほか、板ナデ風のもの（第13図76・78）が特徴的である。底部片では、底部1段目はほとんどが一次タテハケ・ナナメハケのみの資料である（第14図91～93、第15図95・96・99・101～106）。底部1段目に二次調整のヨコハケを施すのは、第15図94・97・98・100であり、一次調整のみの資料が多い。ただ、底部1段目が一次タテハケのみであっても、2段目以降は二次ヨコハケを施す資料が多いと考えられる（第15図99・101）。第15図102は、2段目以降も一次調整タテハケのみである。

体部片（第14図79～90）では、一次タテハケのみ（79）や二次調整のB種ヨコハケを施すもの（85～90）、静止痕が認められないC種ヨコハケを施したもの（81～83）がある。80は、下段が一次タテハケで、上段がB種ヨコハケであるので、おそらく底部1段目から2段目にかかる破片であろう。静止痕を持つB種ヨコハケの資料は、すべて突帯間を1単位でめぐる。しかし、静止痕角度はばらつきがあり、①突帯に対しほぼ90°近い資料（第14図85・88・89）と②70°～80°と傾く資料（第14図87・90）の2タイプが混在している。

内面調整 内面は、底部片はすべて斜め方向のナデ調整である。口縁部片（第14図）は、ナデ調整のもの（72）、縦方向のハケ（71）、横方向のハケ（76～78）と多様である。体部片（第14図）でも、縦・斜め方向のナデ調整を施すものが多いものの（80・83～87・90）、縦・横方向のハケ（79・81）や、部分的に縦や横方向のハケを施すもの（89）がある。また、下段が斜め方向のナデで上段が横・斜め方向のハケを施す例（82）もあるように、内面調整の差は、円筒埴輪の上・下段の部分差の可能性もある。また、外面調整の差と対応関係は認められない。

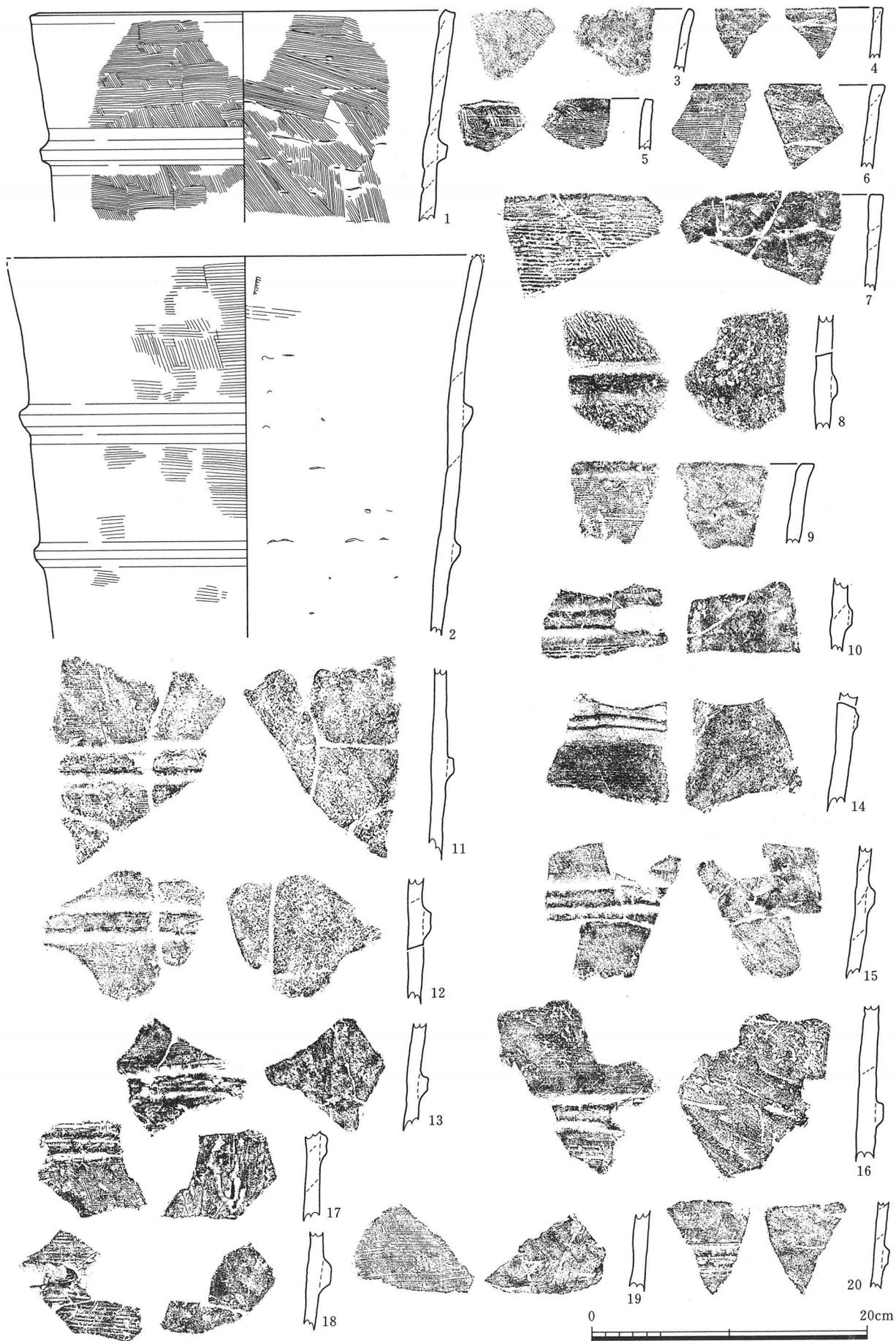
突帯 突帯高0.5cm程度の低い断面M字および扁平な台形の資料が多い。また、第15図102は、断続ナデを施している。

透かし 完形で確認できる例はないが、円形透かしのみである。

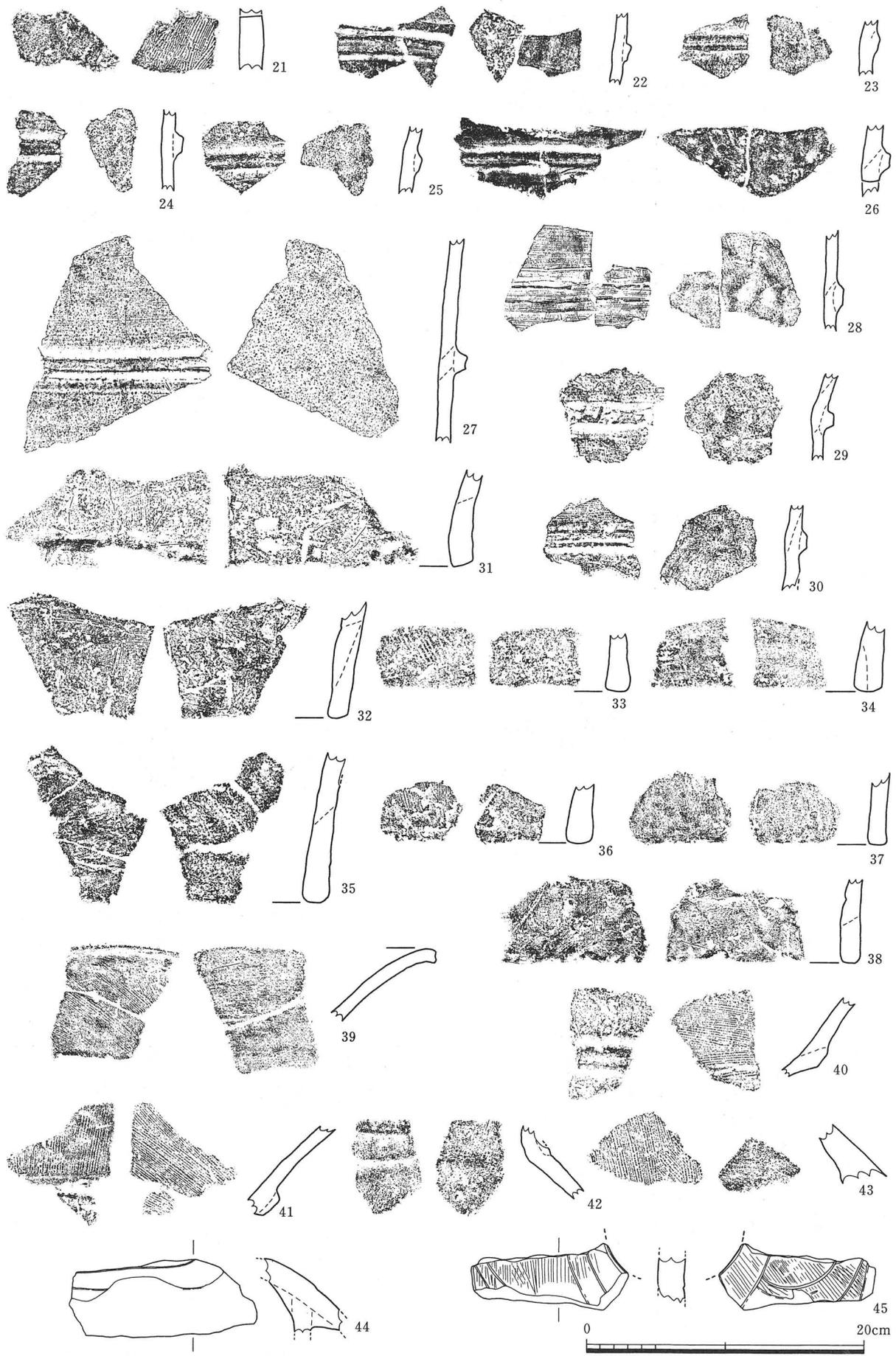
朝顔形埴輪 すべてラップ状に開く部位の資料（第13図65～68）である。65・66は、やや広く開き気味になり、67・68は前者に比べて開きが小さいと考えられる。

形象埴輪 形象埴輪と考えられるのは、第13図73～75である。73は、家形埴輪の裾廻りにめぐる突帯である。74は、円筒部に半だ円状の張り出しを持つものであり、鶏形埴輪などの脚元の基部になる破片かと考えられる。75は、体部径21cmの円筒形であるが、平面はやや不整形であり、他の出土資料と比較して焼成の様相やハケ原体の粗雑さなどから、形象埴輪の基部とも考えられる。

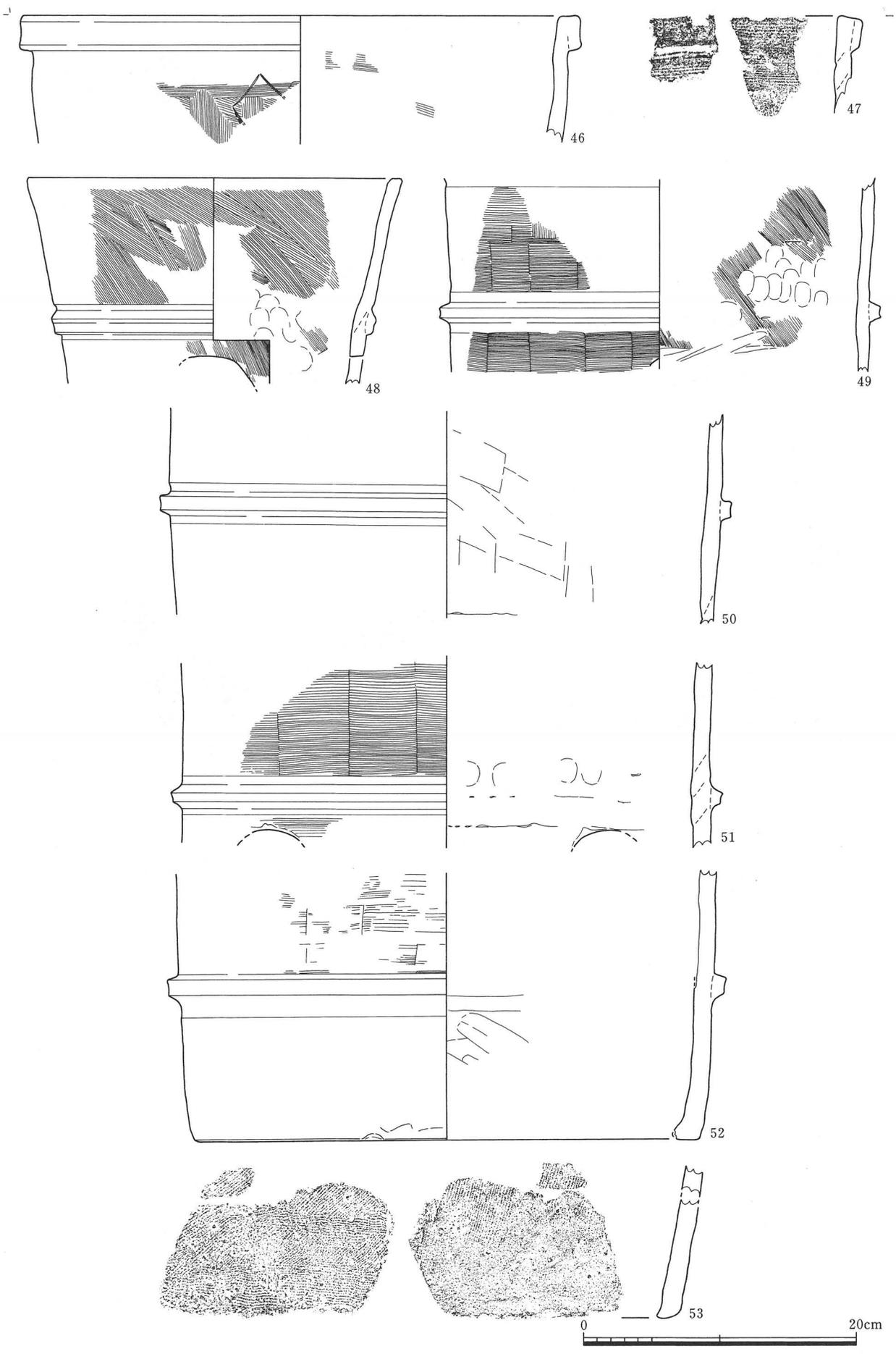
（小浜）



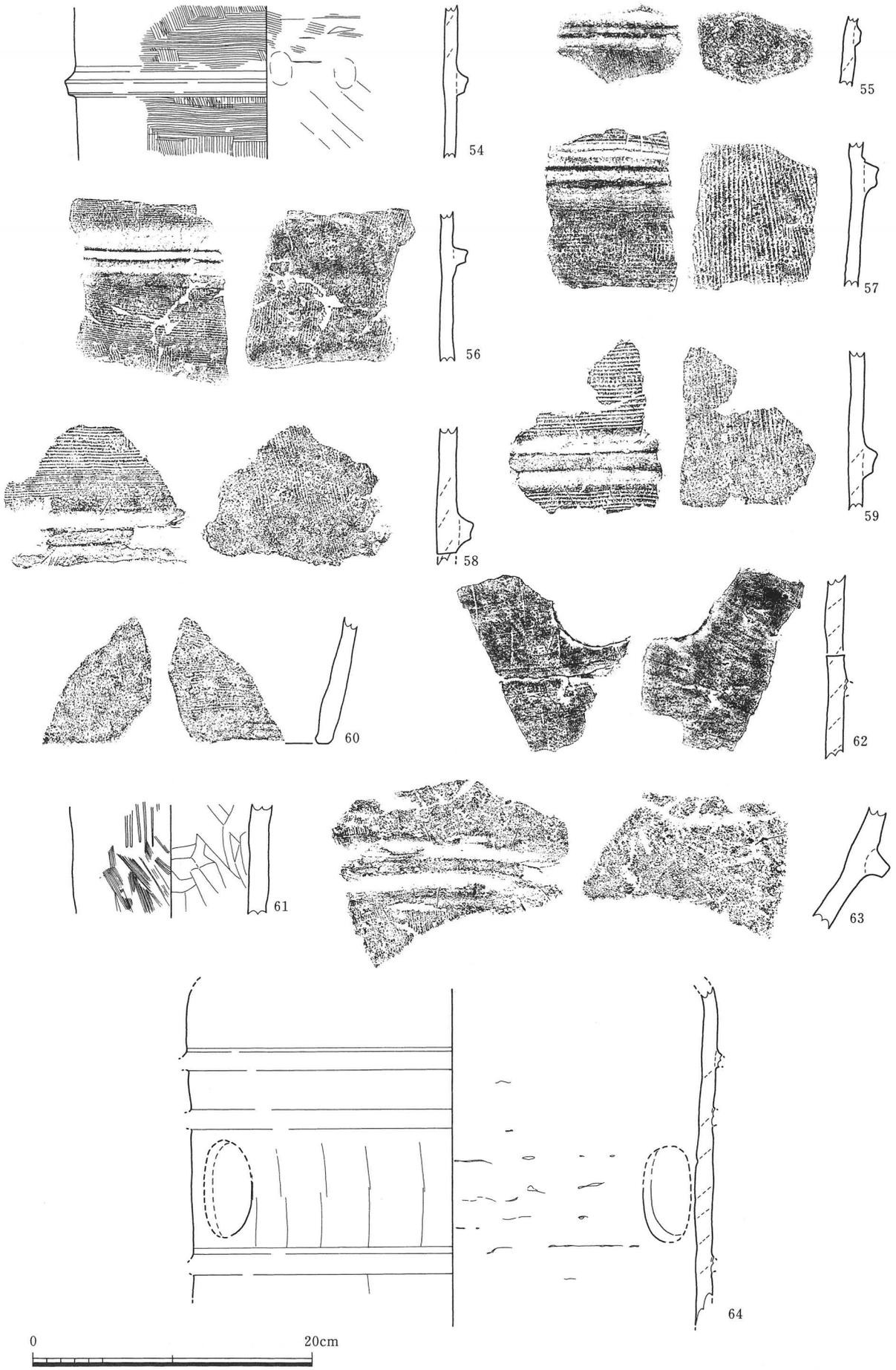
第9図 墳丘西側斜面出土埴輪①



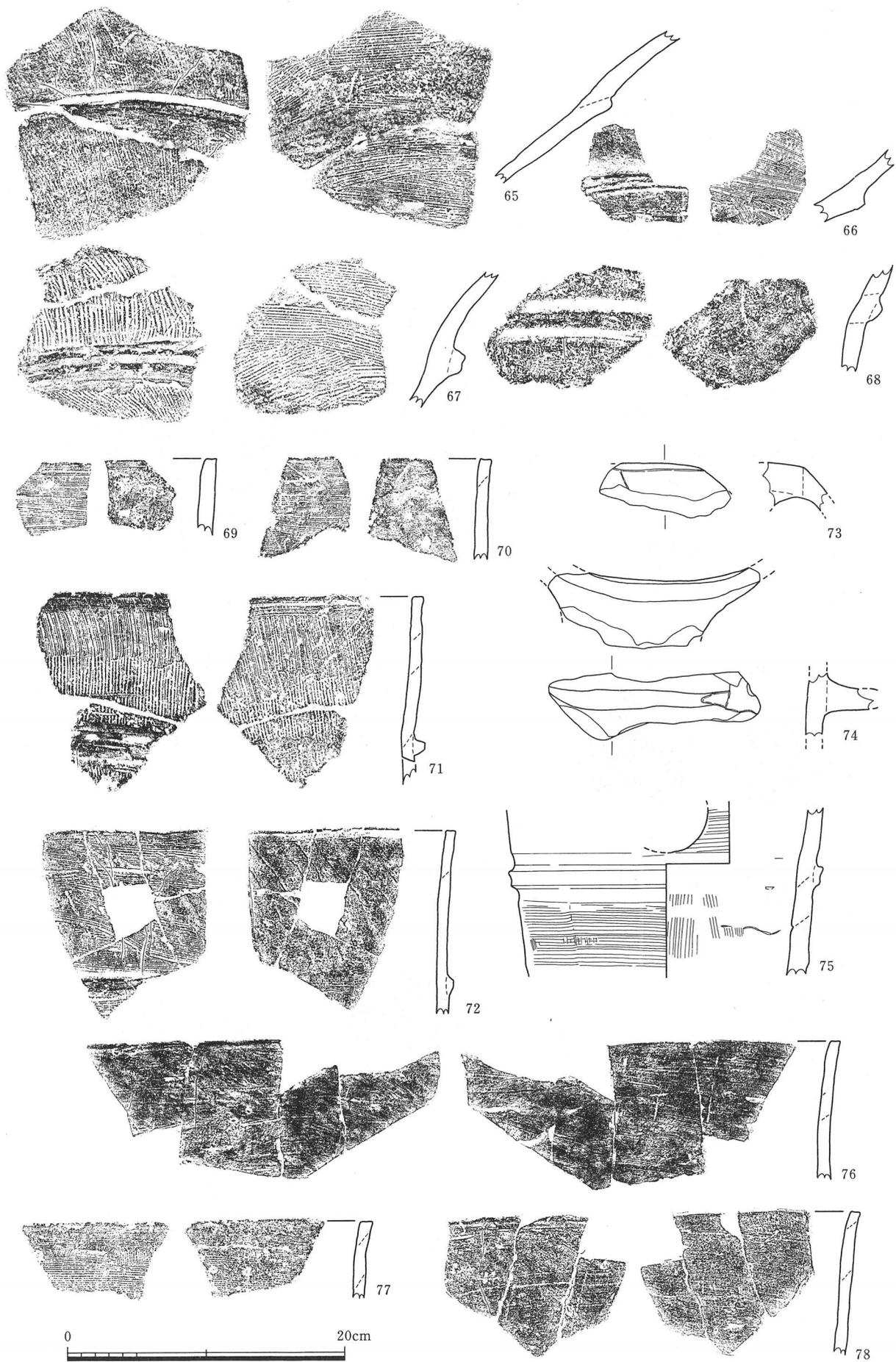
第10図 墳丘西側斜面出土埴輪②



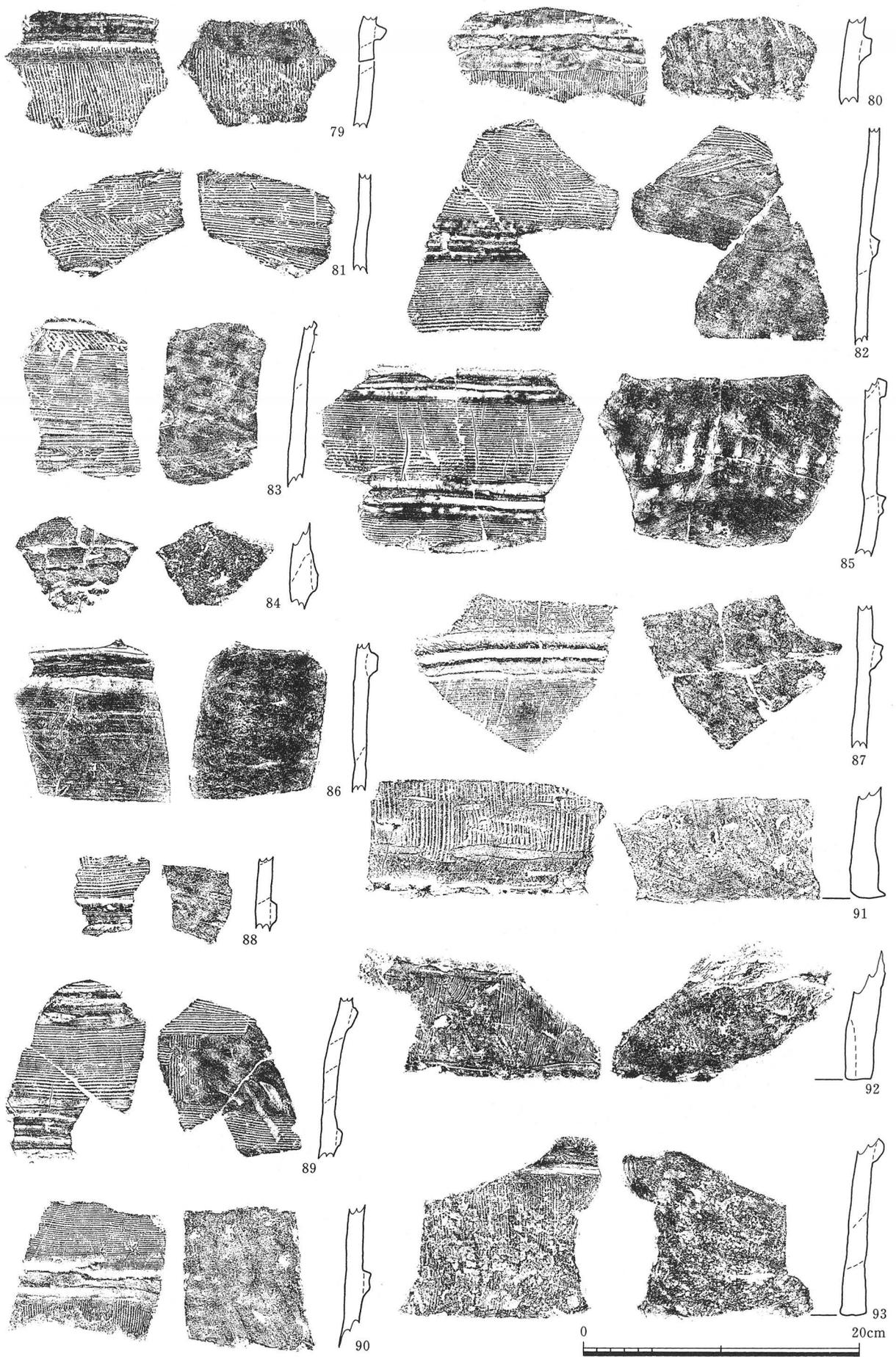
第11図 墳丘盛土内出土埴輪①



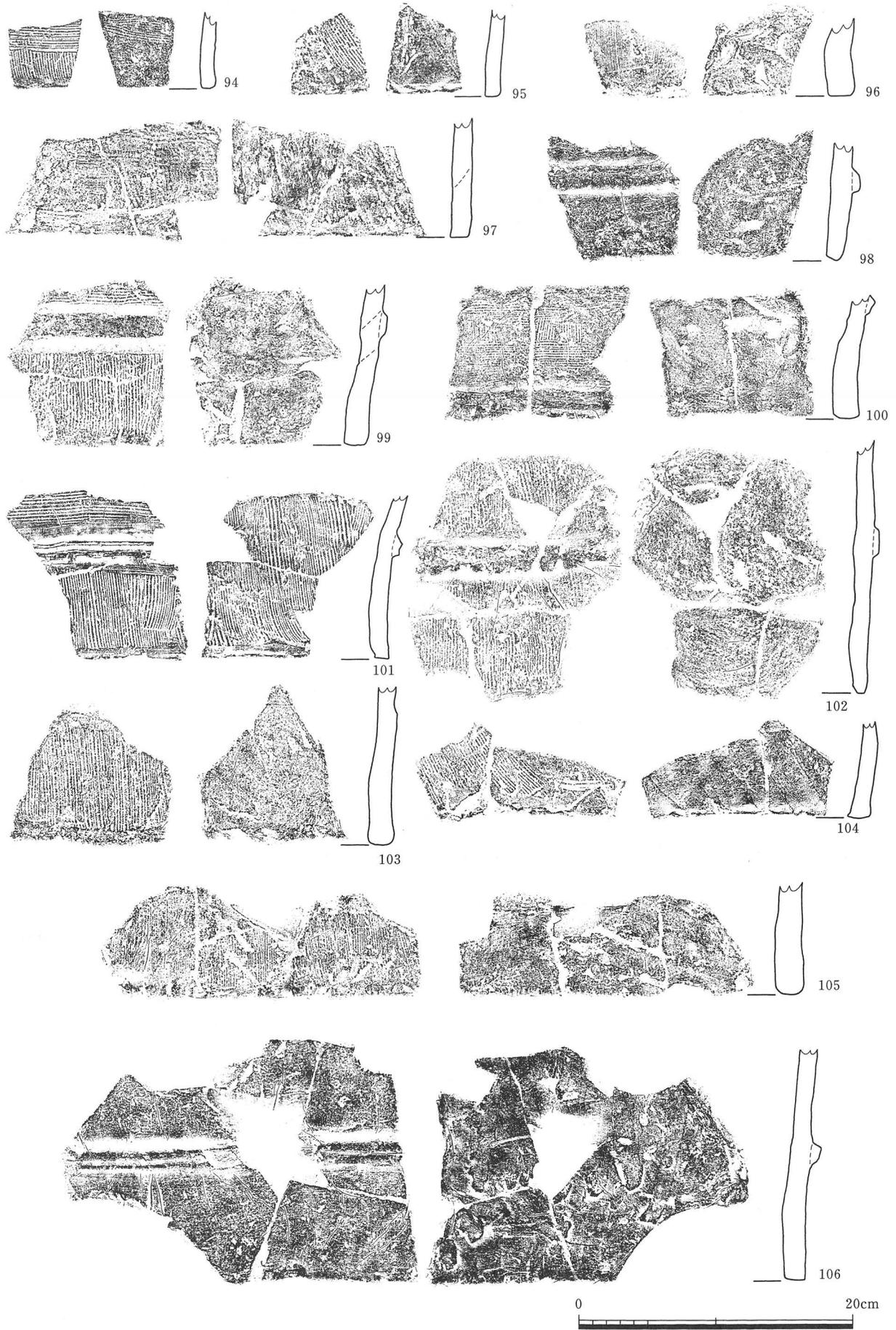
第12図 墳丘盛土内出土埴輪②



第13图 周濠内出土埴輪①



第14図 周濠内出土埴輪②



第15図 周濠内出土埴輪③

第3節 古代から近世

古代の遺物は、古墳時代・奈良時代・鎌倉時代の遺物がごく少量出土し、室町時代と江戸時代の遺物が少量出土した。埴輪を除けば、これらの遺物総量はコンテナ1箱である。

古墳時代は須恵器片が墳丘内と墳丘上・周濠から出土したが、細かい時期は特定できない。奈良時代の遺物は須恵器坏蓋（図版14-9）、土師器坏（図版13-2）、平瓦片（図版14-8）がある。鎌倉時代の遺物は瓦器碗片（図版14-5）と土師質土釜（図版14-6・7）がある。いずれも1から数点ずつで、墳丘東の周濠と墳丘上面をおおっている堆積土から出土した。

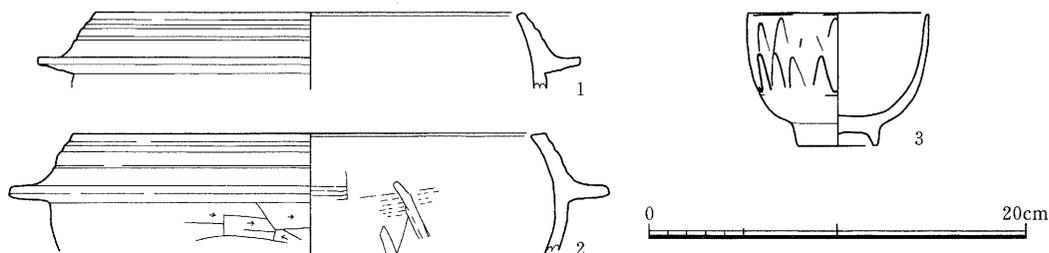
室町時代の遺物は瓦質土釜がある。その多くは墳丘東の周濠から出土したものである。第16図1・2（図版13-1・2・4）は周濠埋土の下層である第14層下部、図版14-1～4は埋土の中層である第14層上部から出土した。15世紀である。これらの遺物によって墳丘東の周濠の埋没年代が15世紀と特定出来た。また14層上部から泥岩製の硯が1点出土した。

江戸時代の遺物は周濠埋土の上層や墳丘西の葺石上面の堆積土から出土した。周濠埋土の上層である第13層からは17世紀後半の陶磁器がまとまって出土しており、周濠の窪みがまったくみられなくなるのがこの時期である。

第13層出土遺物は第16図3（図版13-7）が伊万里の染付で一重の網目文で高台無釉である。図化していないものは図版14-11・14～21に示した。21のすり鉢を除けばいずれも肥前陶磁器である。11は染付碗、14は内外掛分けの銅緑釉皿、15は一重の網目文の染付碗、16は染付小碗、17は染付皿で高台が小さい。18は染付碗、19は染付碗で高台無釉、20は陶器碗である。そのほか粘板岩製の砥石（図版13-6）が出土した。いずれも17世紀後半代に入ると思われる。

墳丘西では葺石の上面をおおう第6層から灰色の釉を掛けた陶器（図版13-8）が出土している。古墳の表土である第5層からは銅緑釉碗と18世紀の伊万里染付碗が出土している。これによって、葺石の上面に土が堆積したのは江戸時代であることが判明した。

そのほか第12層から泥岩製の砥石（図版13-5）が出土した。 （佐久間）



第16図 周濠内出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	からとやまこふん							
書名	唐櫃山古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2000-9							
編著者名	佐久間貴士・小浜成							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2001年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
からとやまこふん 唐櫃山古墳	おじいでらしこふ 藤井寺市国府 1丁目	27226		34° 34′ 07″	135° 37′ 06″	2001年 1月～3月	165	府道堺大和 高田線歩道 拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
唐櫃山古墳	古墳	古墳時代	墳丘・周濠・葺石		埴輪	唐櫃山古墳の葺石及び周濠が初めて検出された。また、墳丘断面の調査により、構築方法が明らかとなった。		

版 圖



唐櫃山古墳石棺



1 調査区全景（西から） 2 調査区全景（東から）



1 墳丘西側1段目テラスと2段目葺石検出状況 2 葺石



1 墳丘東側周濠（西から） 2 墳丘東側周濠（東から）

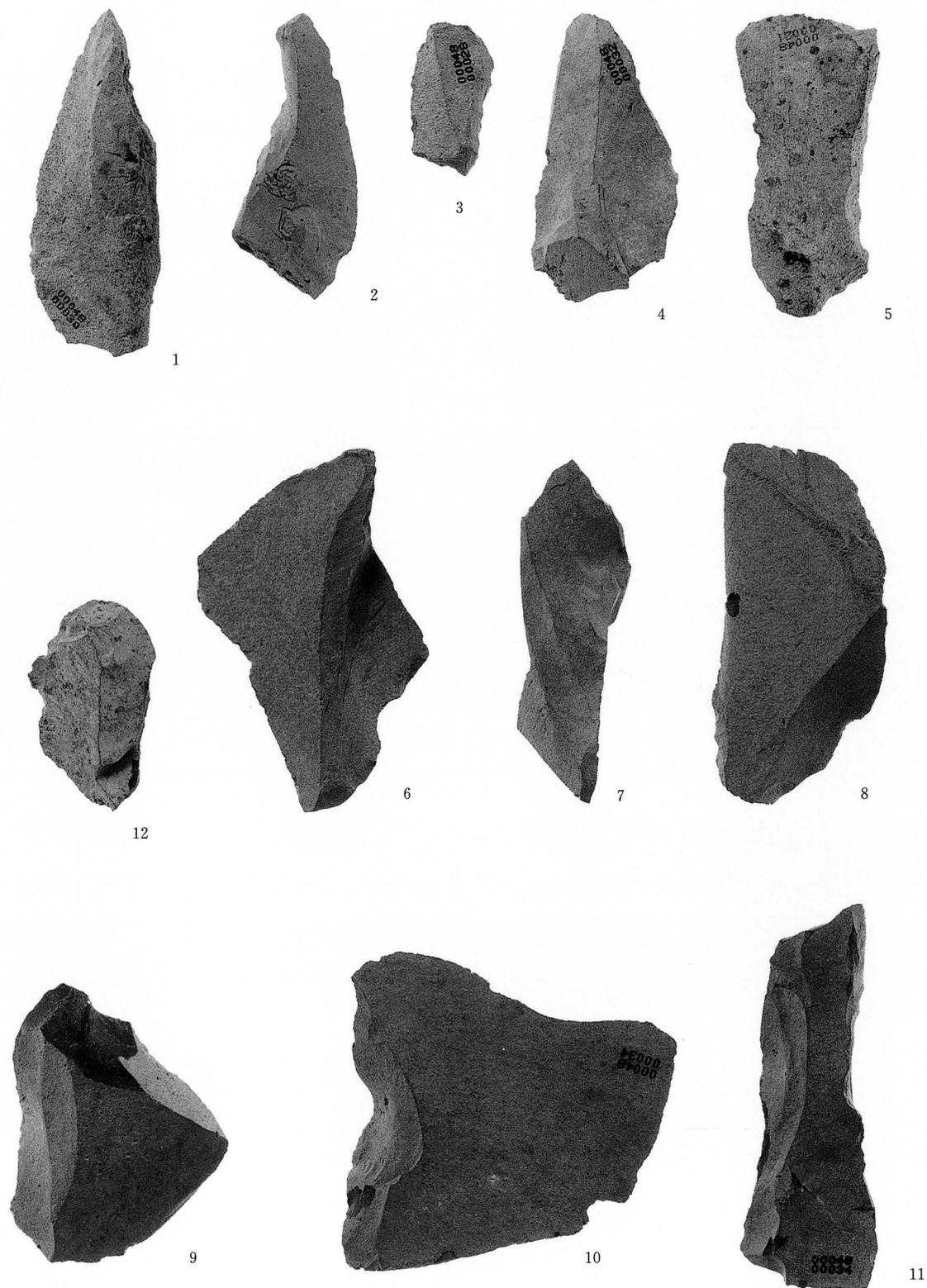


1 墳丘西側断面

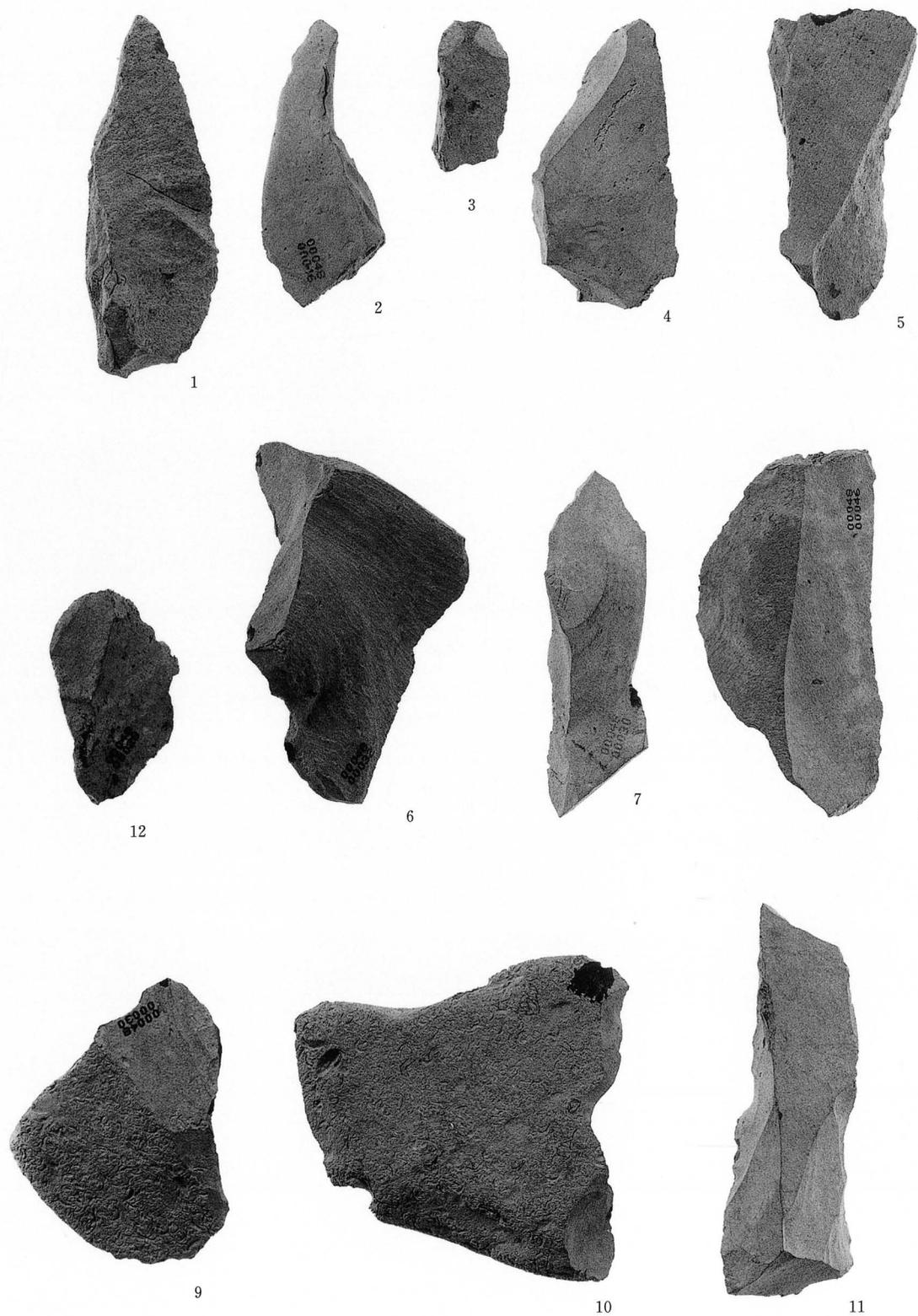
2 墳丘盛土断面 (西から)

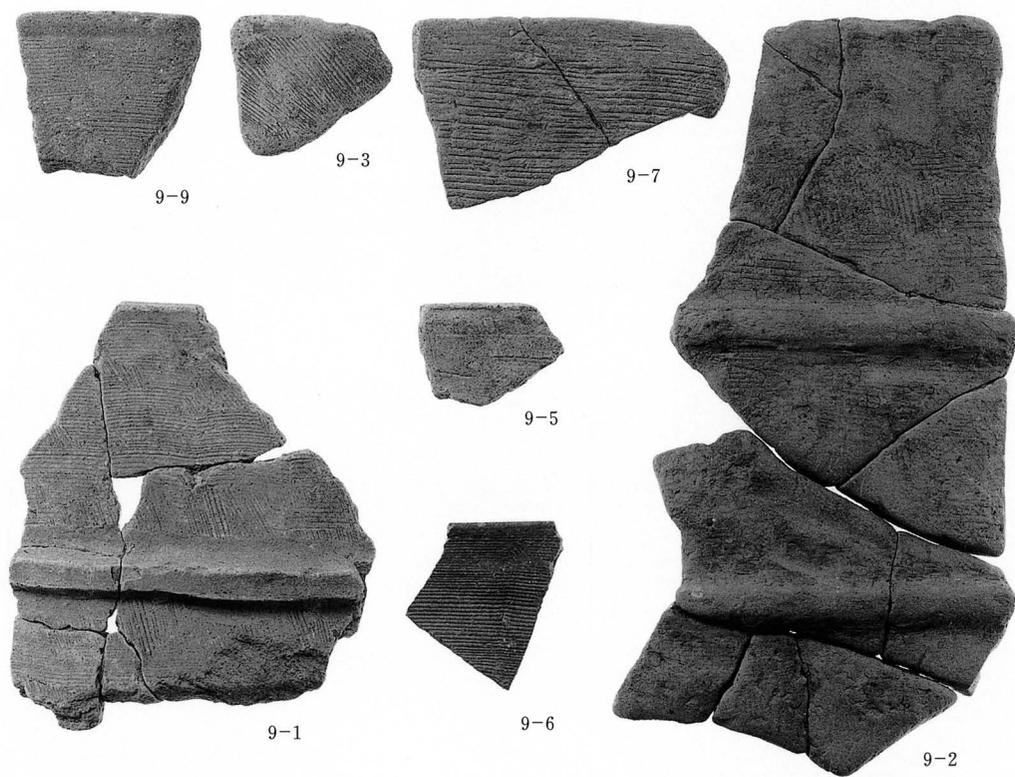
3 1段目テラスと2段目葺石断面 (南から)

4 墳丘盛土断面 (南から)

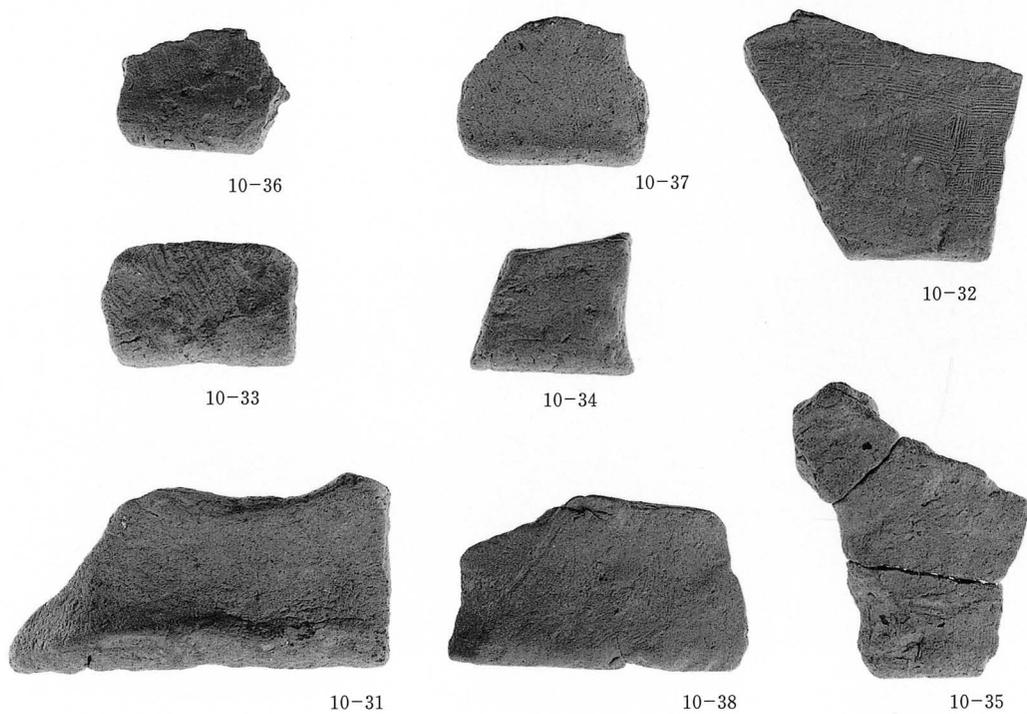


墳丘盛土及び周濠内出土ナイフ形石器 (1~3) 翼状剥片 (4~8)
翼状剥片石器 (9~11) 楔形石器 (2) (原寸)

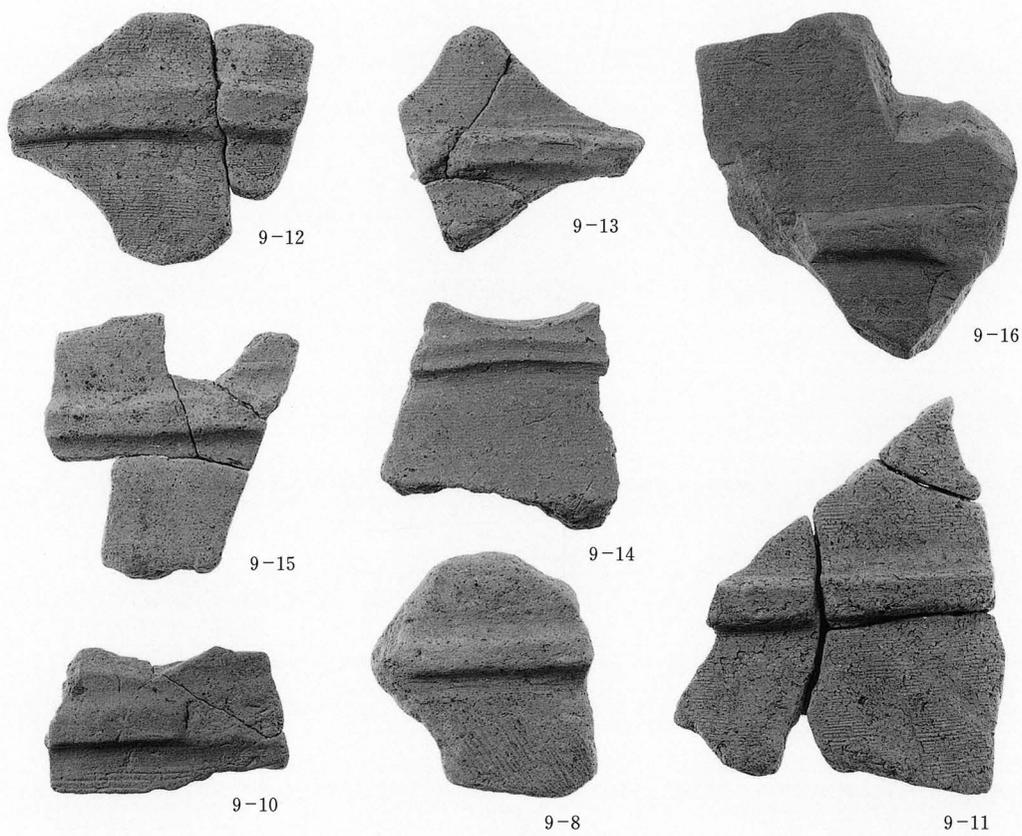




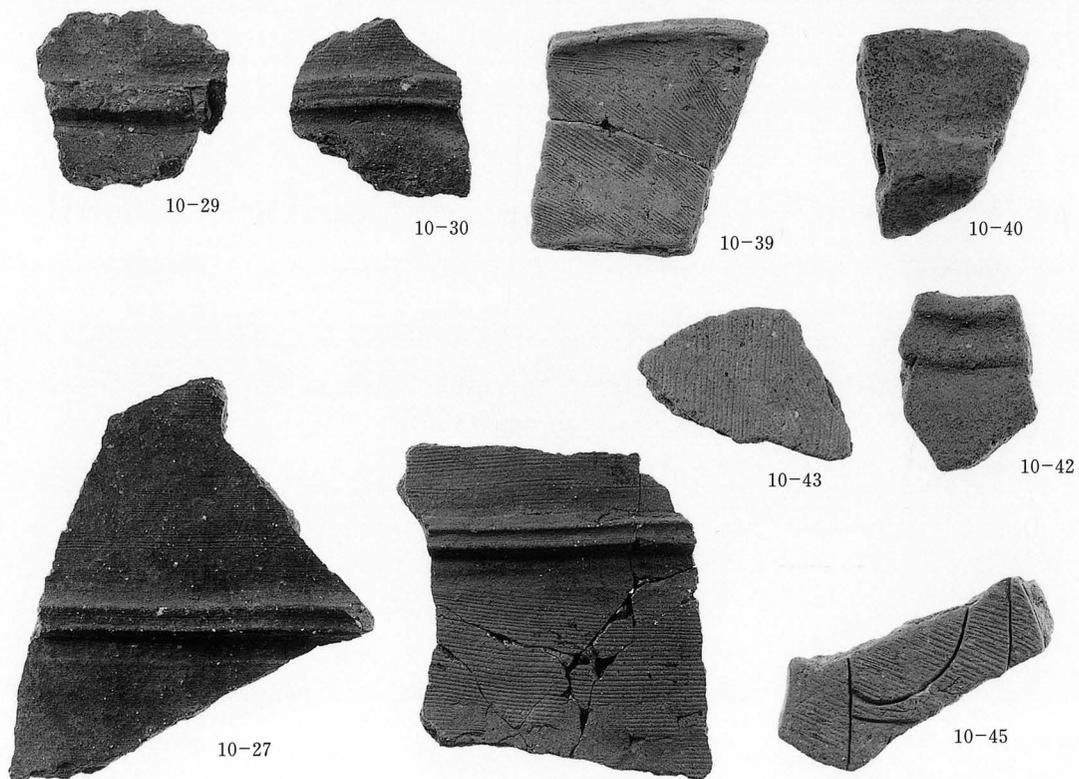
1



2



1



2



11-48



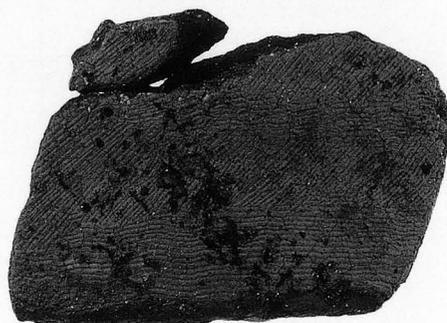
12-57



12-61



11-48



11-53

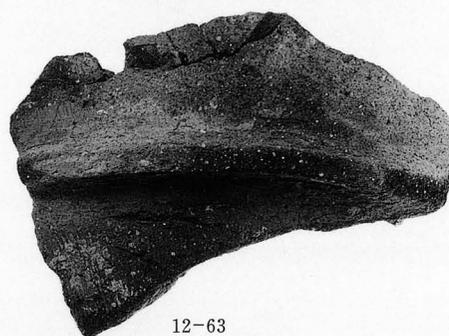


12-55

1



11-52



12-63

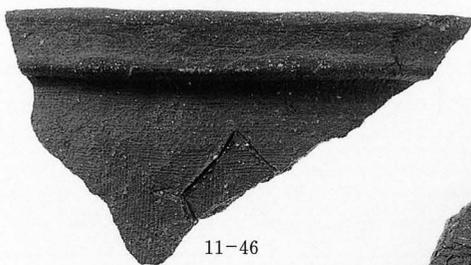


11-49

2



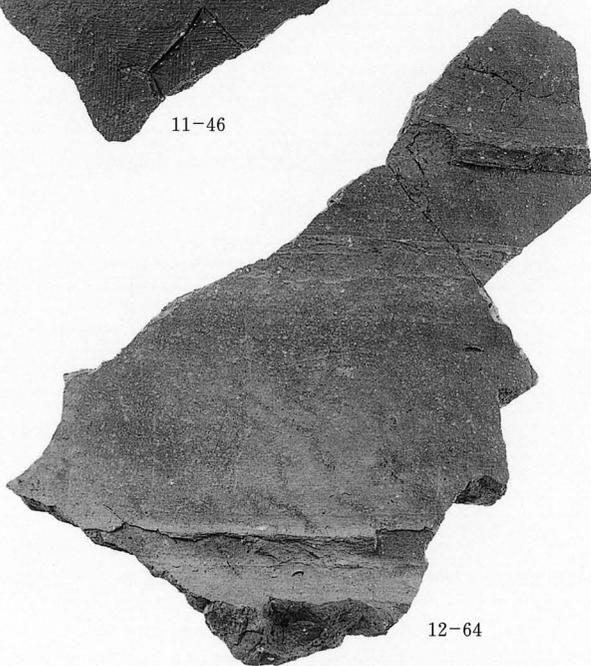
11-47



11-46



12-62



12-64

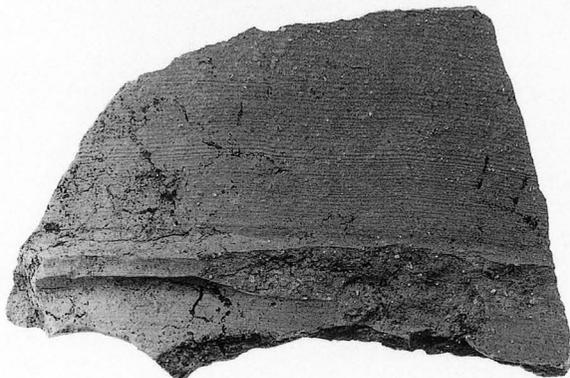
1



12-58



12-59

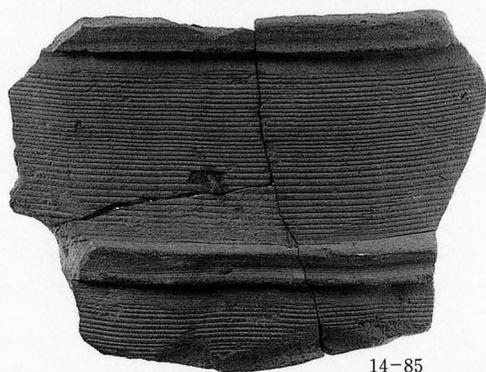
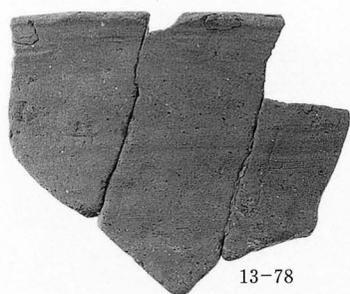


11-51

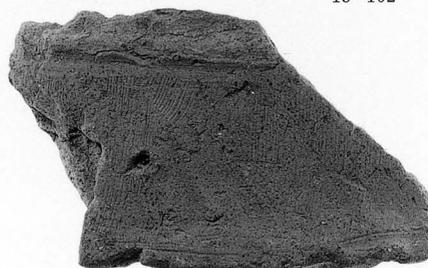


12-54

2



1



2



15-103



15-98



15-94



14-91



15-101

1



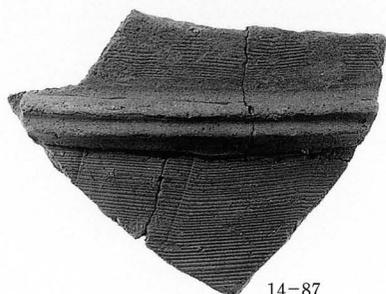
13-77



13-67



14-80

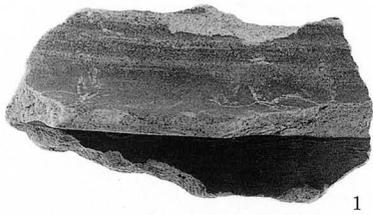


14-87

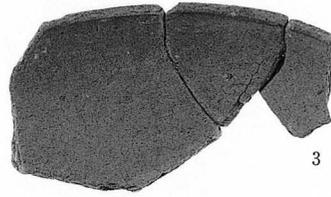


13-65

2



1



3



2



4

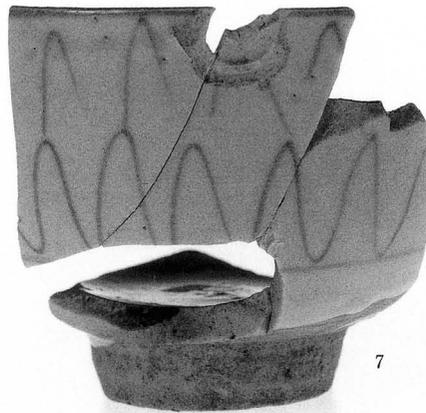
1



5



6



7

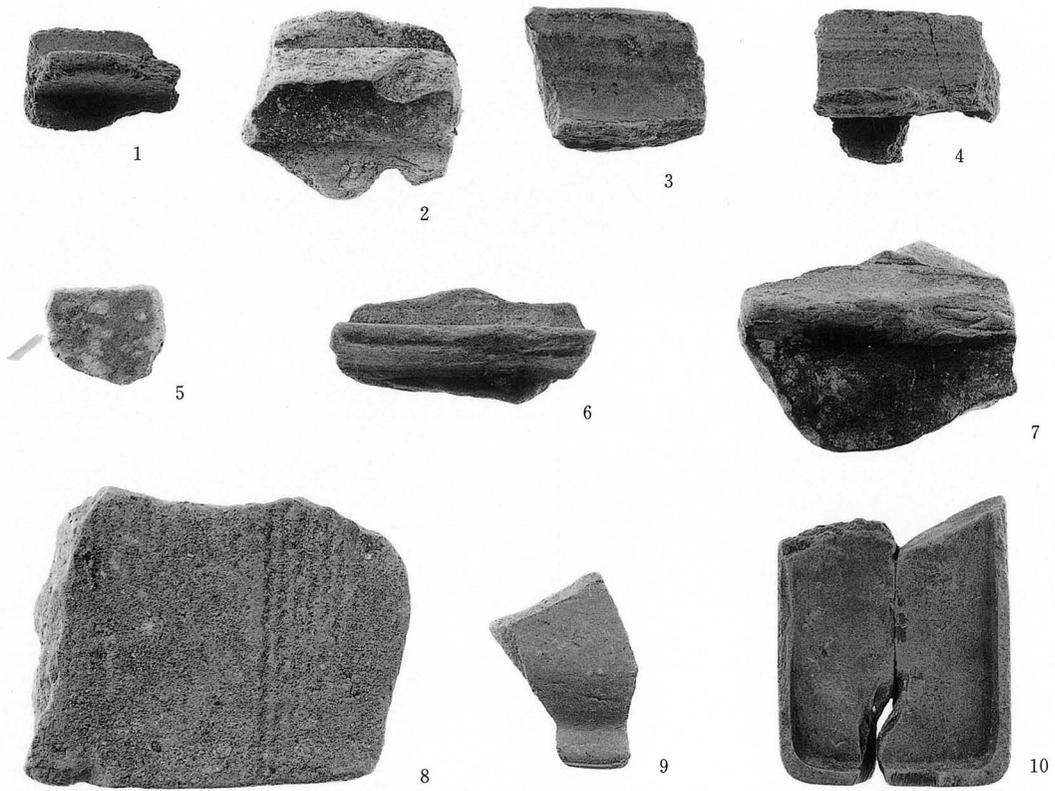
3



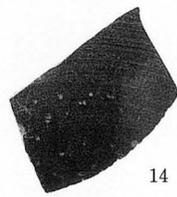
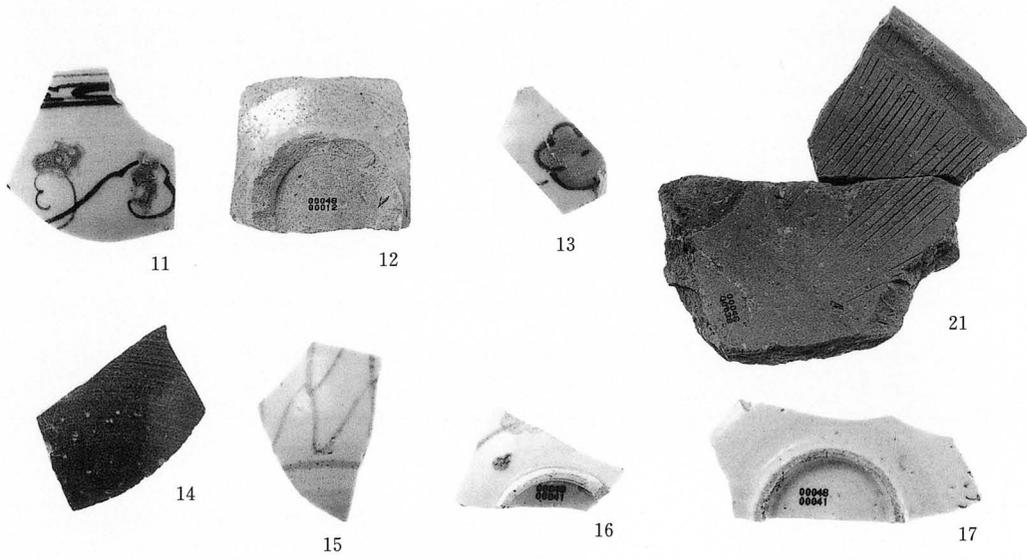
8

2

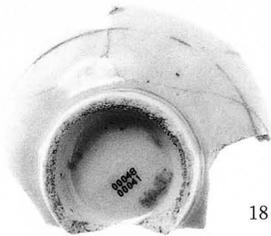
4



1



14



18



19



20

2

墳丘東側周濠内出土遺物

大阪府埋蔵文化財調査報告2000-9

唐櫃山古墳

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL. 06-6941-0351

発行日 2001年3月

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

TEL. 06-6976-8761

